HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	馬場コレクションの再検討 : 北千島の竪穴住居・土器・石器の基礎的研究
Author(s)	高瀬, 克範; 鈴木, 建治
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 140, 1(左)-56(左)
Issue Date	2013-07-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52966
Type	bulletin (article)
File Information	02-1_TAKASE_SUZUKI.PDF

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 140 （2013）

馬場コレクションの再検討
── 北千島の竪穴住居・土器・石器の基礎的研究 ──

高 瀬 克 範
鈴 木 建 治

はじめに

千島列島の考古学的研究の歴史は，明治期から終戦前までの日本人研究者による研究，戦後のロシア人研究者による研究，そしてソヴィエト連邦崩壊後の国際的な共同研究へと変遷してきた。大小 24 の島が弧状にのびる千島列島は南千島，中千島，北千島の 3 つの地理的区分が設定されている。このうち北千島に属する占守島や幌筵島は千島アイヌの居住地として早くから知られており，その学術的関心の高さからすでに明治期には日本人研究者による調査地のひとつとなっていた。

占守島・幌筵島の本格的な学術的調査は，1899 年の鳥居龍蔵による千島アイヌの民族学的・考古学的調査（鳥居 1903，Torii 1911）[1] が最初であり，翌 1900 年には北海道庁属託の河野常吉が高岡直吉（北海道庁参事官）の北千島調査に加わるかたちで考古学的調査を行っている（高岡 1901）。その後，1930 年代の馬場脩による大規模な発掘調査（馬場 1934，1936，1937a，b，c，1939a，b，1940，1970，1979d）を最後に日本人研究者による現地調査はとだえる。

戦後，北千島の調査活動はロシア人研究者がになうこととなったが，馬場の発掘調査に後続する本格的な発掘調査は実施されてはいない。1949〜1952 年には V. A. ポドゥコヴィルキンが（Голубев 1996），1955〜1959 年には Yu. S. ジェルボフスキーが（Желубовский 1964），1974 年には V. O. シュービン

がそれぞれ調査を行っているが（Шубин 1977），いずれも分布調査・表面採集が中心の小規模なものであった[2]。

ソヴィエト崩壊後の状況はそれまでとは一転し，1990 年代から日露米による学際的・国際的な共同研究が開始され，国際千島調査（IKIP International Kuril Island Project 1994–2000）や 2006 年から開始された B. フィッツヒューを代表とする国際調査団（KBP Kuril Biodiversity Project）といった，千島列島全体を射程におさめた大規模な国際研究が展開された（Fitzhugh *et al.* 2002 など）。また近年では，北千島に接するカムチャツカ半島南部でも A. V. プタシンスキーや高瀬克範らによる考古学的調査も行われることで，北千島との文化的関係性が再度注目されるようになってきている（プタシンスキー・高瀬 2008，Takase 2013）。

このように，新たな研究成果が蓄積されつつある現在においてもなお，群を抜く質・量をほこっているのが終戦以前に日本人研究者が収集した資料である。その学術的重要性は低下するどころかますます高まってきており，今日的な観点から内容をあらためて評価しなおす必要性も多分に生じてきている。本稿では，北千島の考古学的研究においては欠かすことのできない資料となっている馬場脩の考古コレクションのうち，とくに馬場編年「第二期：内耳土器時代」に属する土器・石器，およびそれらを出す竪穴住居を，現在の研究視点から再検討することを目的とする。これにより今後，千島列島史研究におけるあらたな認識・解釈を導き出していくための基盤形成をめざす。

１．馬場コレクションと北千島調査の概要

⑴　馬場コレクションについて

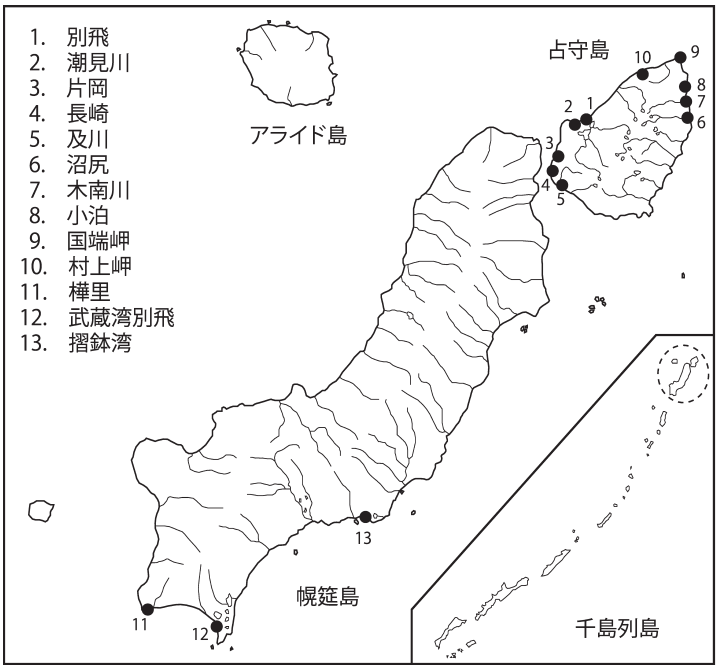
「馬場コレクション」[3] は，おもに北海道島・サハリン島・千島列島で収集・発掘された「民族学資料」と「考古学資料」により構成されている。

1971 年，馬場は自身が生まれ育った函館市の市立函館博物館にコレクションの中の民族学資料 750 件を売却・寄贈した。翌 1972 年には同コレクションの考古学資料 1110 点を寄贈し，これにより彼のコレクションのほぼ全部が市

立函館博物館に所蔵されたことになる。現在，民族学資料は函館市北方民族資料館で，考古学資料は市立函館博物館で収蔵・展示されている。

伝世資料である民族学資料は北方民族の民具資料からなっており，とくにアイヌ文化関連資料は学術的価値が高く 1959 年に国重要有形民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定されている。一般的に言われる「馬場コレクション」とは，このアイヌ文化関連の民族学資料を指すことが多い。

いっぽう出土資料である考古学資料には，土器・石器・骨角器・金属器・陶器・ガラス製品・有機質資料がふくまれている。ただし，市立函館博物館の資料整理方法の都合で土器・石器は「考古学資料」，骨角器・金属器・陶器・ガラス製品・有機質資料は「民族学資料」として分類・収蔵・保管されている。1110 点の考古資料のうち，891 点が北千島出土資料によってしめられている。フィールドノートや遺物台帳など調査当時の状況を知りえる文献は，



第 1 図　北千島において馬場脩が考古学的調査を実施した遺跡分布図

残念ながら市立函館博物館には寄贈されていない。しかし，考古学資料の出土状況に関する基礎的情報は，馬場の論文や書籍等による発掘調査報告と遺物に直接記載されている注記（出土地，遺跡名，発掘調査年あるいは収集年など）から読み取ることが可能である。なお，考古学資料の注記は，博物館学芸員の手によって行われたものであることがわかっている。

⑵　馬場脩による北千島調査について（第 1 図）

馬場脩による北千島の発掘調査は，占守島と幌筵島において 1933 年，1935～1938 年の計 5 回実施されている（馬場 1934，1936，1937a，b，c，1939a，b，1940，1970，1979d）。1937 年の第 4 回調査と 1938 年の第 5 回調査には，日本民族学会の「北方民族調査団」の一員として岡正雄が参加している。1937・1938 年には，児玉作左衛門による千島アイヌ墳墓発掘調査団の嘱託としても調査を行っている。なお，1934 年に調査が実施されていないのは，函館大火が影響しているようである（馬場 1979d：49）。

馬場の調査地は，第 1 ～ 4 回が占守島，第 5 回が幌筵島である。調査対象となった遺構は，竪穴住居・貝塚・墓である。第 1 回調査における分布調査では，別飛湾沿岸台地で竪穴住居が約 200 軒，片岡湾では約 40 軒が確認されている（馬場 1934）。

各遺構の詳細をみてみると[4]，第 1 回調査では「武田工場裏竪穴」，未命名の竪穴 6 ～ 7 軒，「潮見川第一貝塚」[5]，「別飛第二～第七貝塚」[6]，「片岡貝塚」が発掘されている。第 2 回調査では「第一号～第八号竪穴」，未命名の竪穴数軒，「潮見川第一貝塚」，「別飛第七貝塚」，「旧武田漁場裏手貝塚」，未命名の貝塚 1 ヶ所，未命名の墓 1 ヶ所が発掘されている。第 3 回調査では「別飛第一号，第二号竪穴」[7]，「及川第一号～第十三号竪穴」，「木南川竪穴」，「仲野川第一号，第二号竪穴」，「及川貝塚」，「国端岬貝塚」が調査されている。第 4 回調査では，「潮見川第一号～第三号竪穴」，「別飛第一号～第六号竪穴」[8]，「沼尻第一号竪穴」，「小泊第一号～第六号竪穴」，「潮見川第二貝塚」，「小泊貝塚」，「村上岬貝塚」が発掘の対象となっている。第 5 回調査では，「樺里第一号～第十五号竪穴」，「突加里貝塚」，「武蔵湾別飛貝塚」，「樺里貝塚」が発掘されて

いる。「旧土人村落竪穴」と「武蔵湾竪穴」をふくむ竪穴5軒と「墳墓跡」1ヶ所は，明確な調査時期が不明である。

以上，計5回の調査により発掘された遺構は，竪穴住居60軒以上，貝塚17ヶ所，墓2～3ヶ所であった。戦前の日本考古学全体をみまわしても，集落の発掘調査例としては有数の規模であったことは間違いない。

馬場による大規模な調査の成果は，「第一期：オホーツク式土器時代」，「第二期：内耳土器時代」，そして歴史時代に属する「第三期：末期」という北千島の考古学的編年に集約される（馬場1939a，b）。この編年の枠組みの有効性は現在でも失われてはいない。

2．検出された竪穴住居

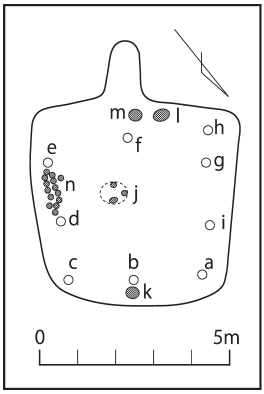
占守島・幌筵島において馬場脩が調査した竪穴住居の正確な数は判然としないが，おおよそ60軒以上であったと考えられる。このうち，本章で言及する竪穴住居は馬場編年の「第二期」に属するものである[9]。ここでは馬場の報告をもとに情報整理を行い，市立函館博物館に収蔵されている考古学資料との対比結果については後述する。

検討の対象となる竪穴住居は，占守島「及川第一号，第四号，第八号竪穴」，同「潮見川第一号，第二号竪穴」，同「別飛第一号，第二号竪穴（1937年調査）」，同「別飛第五号，第六号竪穴」，幌筵島「樺里第十号竪穴」の計10軒である[10]。

a）占守島・及川第一号竪穴（馬場1939a）（第2図）

立地：及川武田漁場の丘陵上に位置する。

住居の形態と規格：張り出し部を有し，平面形が台形に近い長方形を呈する竪穴である。張り出し部を含めると住居の長さは約6mである。張り出し部を含めない遺構の規模は，南東壁側で4.7m，北西壁側で4.4mである。幅は，前方壁側で5.4m，後方壁側で4.2mであり，奥にいくにしたがって狭くなっている。深さは1.13m（発掘前93cm，床面まで20cm）である。張り出し部は，長さ約1.5m，幅約1mである。



第 2 図　占守島及川第一号竪穴平面図［馬場（1939a）第 24 図を一部変更］

住居内の遺構：配石遺構 1 ヶ所，炉跡状遺構 1 基，柱穴 9 基が確認された。配石遺構（ｎ）は住居南東壁沿いに位置しており，75×35 cm の範囲に 5 〜10 cm 程度の小石が敷石状に配置されている。炉跡状遺構（ｊ）は，住居中央部に位置しており，3 個の小石をともなう。柱穴は住居壁沿いに配置されている。各柱穴の規格は，柱穴（ａ）が径 11 cm，深さ 40 cm，柱穴（ｂ）が径 15 cm，深さ 35 cm，柱穴（ｃ）が径 20 cm，深さ 55 cm，柱穴（ｄ）が径 20 cm，深さ 50 cm，柱穴（ｅ）が径 15 cm，深さ 50 cm，柱穴（ｆ）が径 10 cm，深さ 20 cm，柱穴（ｇ）が径 20 cm，深さ 60 cm，柱穴（ｈ）が径 15 cm，深さ 20 cm，柱穴（ｉ）が径 15 cm，深さ 55 cm である。また，住居主体部の張り出し部付近（ｌ・ｍ）と後方壁側中央部（ｋ）に礫が置かれていた。

出土遺物：2 〜 3 点の「石片」のみが確認されている。

遺物の出土状況：記載されていない。

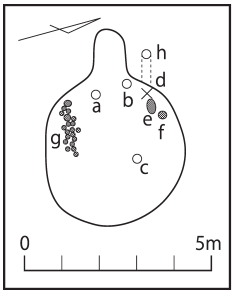
ｂ）占守島・及川第四号竪穴（馬場 1937a，1939a）（第 3 図）

立地：及川武田漁場の丘陵上に位置する。

住居の形態と規格：張り出し部を有し，平面形は類方形あるいは楕円形を呈する。住居の長さは，張り出し部を含めると約 5.3 m である。張り出し部をのぞく遺構の長さは約 4 m，幅は約 3.9 m［約 3.8 m（馬場 1937a）］である。深さは約 80 cm（発掘前約 35 cm，床面まで 45 cm），張り出し部は長さ 1.3 m，幅約 1 m である。

住居内の遺構：配石遺構 1 ヶ所，煙道状遺構 1 基，柱材が一部残存する柱穴 1 基，柱穴 2 基が確認された。配石遺構（ｇ）は住居西南隅に位置し，1.2×0.28 m［1.3×0.3 m（馬場 1937a）］の範囲に小石が敷石状に配置されている。煙道状遺構（ｄ・ｈ）は手前壁北側に位置しており，地表面下約 30 cm

の壁に径約 30 cm の楕円状のピット（d）が掘られており，住居外に向かって 45 cm 行った地点で開口（h）している。また，住居内の煙道状遺構付近には礫 2 点（e・f）が置かれていた。柱穴は，住居本体と張り出し部の接続部付近（a・b）と住居中央部付近（c）に配置されている。柱穴（a）は径 8 cm で床面から約 20 cm の柱材が残存している。柱穴（b）は径 13 cm，深さ 28 cm，柱穴（c）は径 10 cm，深さ 28 cm である。



第 3 図　占守島及川第四号竪穴平面図［馬場（1939a）第 26 図を一部変更］

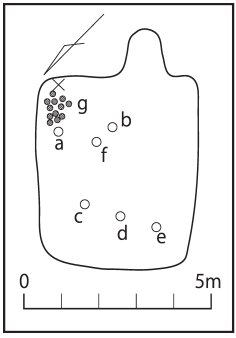
出土遺物：完形の内耳土器 1 点［馬場（1939 a）第 39 図，馬場（1940）第 38 図］と内耳土器片数点［馬場（1940）第 39 図］，「石鏃」2 点，石斧 1 点［馬場（1939a）第 38 図 5］，「腐蝕した皮片」数点と「鉄片」1 点が確認された。

遺物の出土状況：完形の内耳土器と内耳土器片は住居内の煙道状遺構直下から出土し（地点×），内耳土器片数点のうち 1 点は煙道内部から出土した。「腐蝕した皮片」と「鉄片」は，配石遺構（g）直上から出土している。

c）占守島・及川第八号竪穴（馬場 1937a，1939a）（第 4 図）

立地：及川口付近に位置する。

住居の形態と規格：張り出し部を有する，長方形プランの竪穴である。張り出し部が南西壁側にやや寄る。住居の長さは，張り出し部を含めると 6 m を超える。張り出し部をのぞく住居の長さは北東壁側で 4.7 m，南西壁側で 5 m である。幅は前方壁側で 4 m，後方壁側で約 3.65 m である。深さは約 95 cm（発掘前 75 cm，床面まで約 20 cm）である。張り出し部は，長さが約 1.3 m［1.5 m（馬場 1937a）］，幅が約 1 m である。



第 4 図　占守島及川第八号竪穴平面図［馬場（1939a）第 28 図を一部変更］

住居内の遺構：配石遺構1ヶ所，柱材が一部残存する柱穴1基，柱穴5基が確認された。配石遺構（g）は南東隅に位置し，65×25 cmの範囲に小石が敷石状に配置されている。柱穴は壁沿いではなく中央部よりに配置されている。柱穴（b）は径15 cm，深さ60 cmである。柱材が一部残存している。柱穴（a）は径10 cm，深さ35 cm，柱穴（c）は径10 cm，深さ55 cm，柱穴（d）は径13 cm，深さ50 cm，柱穴（e）は径10 cm，深さ約45 cmである。なお，住居周辺には周堤が残存していた。

出土遺物：大型の内耳土器片（数点の土器片が接合）1点［馬場（1940）第40図］，有柄石器［馬場（1939a）第38図17）］が出土した。

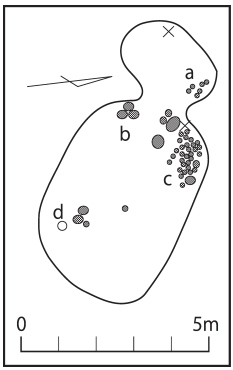
遺物の出土状況：大型の内耳土器片は，前方壁と北東壁が成す隅の配石遺構付近で出土した（地点×）。

d）占守島・潮見川第一号竪穴（岡・馬場1938，馬場1939a）（第5図）

立地：潮見川西出カニ缶詰工場の近くの竪穴群の一つである。

住居の形態と規格：比較的大型の張り出し部を有し，類長方形の平面形を呈する。住居の長さは張り出し部を含めて約7.7 mで，張り出し部をのぞく長さは約5.7 m，幅が3.6 mである。深さは73 cm（発掘前23 cm，床面まで50 cm）である。張り出し部は長さが約2 m，幅が2.7 mである。

住居内の遺構：配石遺構3ヶ所，柱穴1基が確認されている。配石遺構（a）は，張り出し部の北東壁沿いに位置しており，85×25 cmの範囲に数個の小石が2列に配置されている。配石遺構（b）は北西隅に位置しており，径20 cm程度の扁平状の礫3個が配置されている。配石遺構（c）は配石遺構（b）の反対側の北東隅に位置しており，1.8×1.15 mの範囲に径10〜25 cmの小石が弧状に配置されている。この地点では「灰土」が所々に確認される。柱穴（d）は南西隅に位置し，径



第5図　占守島潮見川第一号竪穴平面図［馬場（1938）第2図を一部変更］

10 cm，深さ 70 cm である。

出土遺物：完形の内耳土器 2 点［岡・馬場（1938）図版 2 － 1，4，馬場（1939a）第 39 図 2，3，馬場（1940）第 34 図］，内耳土器片 3 点，石斧 2 点［岡・馬場（1938）図版 2 － 2，3］が出土している。

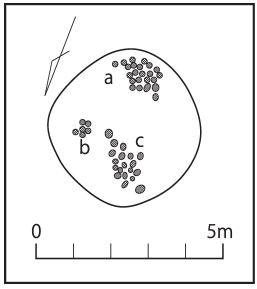
遺物の出土状況：完形の 4 耳の内耳土器は，張り出し部の前方壁中央部直下から口縁部を上に向けた状態で出土した（地点×）。完形の 2 耳の内耳土器は，配石遺構（c）の上面において出土した（地点×）。内耳土器片も 2 耳の内耳土器出土地点付近で出土した。2 点の石斧は，後方壁沿いの床面直上から出土した。

e）占守島・潮見川第二号竪穴（岡・馬場 1938，馬場 1939a）（第 6 図）

立地：潮見川第一号竪穴より上の高斜面の西出工場に近接する所に位置する。

住居の形態と規格：平面形が円形を呈する竪穴である。住居の長軸は 4.43 m，短軸は 4.17 m である。深さは，地表面から床面直上まで 55 cm である。住居の出入口は，海辺に面する北西側であると想定されている。

住居内の遺構：配石遺構 3 ヶ所，炉跡状遺構 1 基が確認されている。配石遺構（a）は，南壁沿いに位置しており，1 ×0.8 m の範囲に径 10～25 cm の小石が配置されている。石の隙間には多量の「灰土」と被熱により破砕した礫片が確認された。配石遺構（a）の下には，炉跡状遺構が確認された。長さ 75 cm，幅 60 cm，深さ約 13 cm のピットが検出され，その底面は赤色した焼土が認められている。配石遺構（b）は東壁側に位置しており，径 0.3 m の円形の範囲内に小石が積み上げられている。配石遺構（c）は北西壁側に位置しており，1.55×1.45 m の範囲に小石が配置されている。「灰土」も確認される。



第 6 図　占守島潮見川第二号竪穴平面図［馬場（1938）第 4 図を一部変更］

出土遺物：内耳土器片 1 点[11]，楔形石器 1 点。

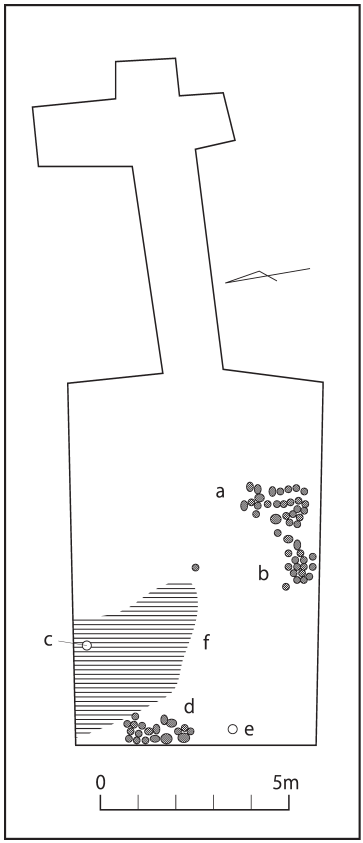
遺物の出土状況：表土から内耳土器片が出土している。楔形石器は南壁側の表土から出土している。

ｆ）占守島・別飛第一号竪穴（1937 年調査）（岡・馬場 1938，馬場 1939a）（第 7 図）

立地：別飛別所沼に沿う高地に位置する。

住居の形態と規格：十字状の張り出し部を有する，平面形が長方形の竪穴である。張り出し部をふくむ長さは約 18.5 m と，非常に大型である。張り出し部を含まない住居の長さは 9.8 m，幅は 6.6 m，深さは約 1.1 m（発掘前約 70 cm，床面まで約 40 cm）である。張り出し部の長さは約 8.7 m である。張り出し部先端の十字部の幅は約 5.2 m であり，通路の幅は約 1.8 m，深さは約 90 cm（発掘前約 60 cm，床面まで約 30 cm）である。

住居内の遺構：地表面下約 20 cm に 3 個の礫（最大長 45 cm も含む）を使ったコの字状の配石遺構が確認された。その内部には少量の炭化物がみられることから炉跡と考えられる。住居床面付近においては配石遺構 3 ヶ所，柱穴 2 基，「貝塚」（貝殻・獣骨が混ざる範囲） 1 ヶ所が確認されている。配石遺構（ａ）はやや前方壁寄りの南壁沿いに位置しており，２×１m の範囲に径約 10 cm の小石が配置されている。配



第 7 図　占守島別飛第一号竪穴平面図［馬場（1938）第 8 図を一部変更］

石遺構（b）は配石遺構（a）の西側に隣接しており，50×50 cm の範囲に円形になるように径約 10 cm の小石が積み上げられている。これらの配石遺構は，住居内部の「高まり」に位置する。配石遺構（d）は後方壁沿いに位置しており，1.6×0.72 m の範囲にコの字状に径約 25 cm の礫が積み上げられている。

これら 3 つの配石遺構（a・b・d）に使用されている小石・礫は被熱により変色し，破砕されている。また，炭化物も多量に認められることから，炉としての機能が考えられる。柱穴（c・e）は後方壁側で確認された。柱穴のサイズは 2 基とも径 10 cm，深さ約 70 cm である。「貝塚」（f）は住居の西側から中央部にかけて分布している。北壁付近では最大厚が約 10 cm となる貝層がひろがり，柱穴（c）のある地点では，6 cm の「黒色灰土層」（灰層），40 cm の貝殻・獣骨が混じる層，5 cm の「黒炭層」（炭化物が混じる黒色層）が重なり床面に達する。

出土遺物：出土遺物は，「地表面下約 25 cm 面」，「床面」，「貝塚（f）」で確認されている。

① 「地表面下約 25 cm 面」：内耳土器片数点，石斧 1 点［岡•馬場（1938）図版 5 － 2，馬場（1939a）第 38 図 2］，「石鏃」2 点［岡•馬場（1938）図版 5 －12，13，馬場（1939a）第 38 図 13］が出土した。

② 「床面」：大型の内耳土器片 1 点（数点の土器片が接合）［岡•馬場（1938）図版 5 － 8］，石錘 1 点［岡・馬場（1938）図版 5 － 6］，有柄石器 6 点［岡・馬場（1938）図版 5 － 5，7，9，10，14，15，馬場（1939a）第 38 図 6 ～ 8］，石斧 2 点［岡•馬場（1938）図版 5 － 3，4，馬場（1939a）第 38 図 3］，敲石 1 点［岡•馬場（1938）図版 5 － 1，馬場（1939a）第 38 図 1］が出土した。

③ 「貝塚（f）」：「石鏃」1 点［岡・馬場（1938）図版 5 －11］，「石器」1 点［岡・馬場（1938）図版 5 －16］，「骨錘」5 点［岡・馬場（1938）図版 6 － 1 ～ 5，馬場（1939a）第 40 図 11～15］，「骨製刺突具」2 点［岡•馬場（1938）図版 6 － 7，8，馬場（1939a）第 41 図 12，13］，「鳥管骨素材の骨鏃」7 点［岡•馬場（1938）図版 6 － 9 ～15，馬場（1939a）第

41 図 15，16]，「骨製中柄」2 点 [馬場 (1938) 図版 6 －16，17]，「骨斧」1 点［岡・馬場（1938）図版 6 －18]，「海獣牙製の装飾品？」1 点［岡・馬場（1938）図版 6 －19]，「鹿角製釣針の幹」1 点［岡・馬場（1938）図版 6 －20]，「鳥管骨素材の針入れ」1 点［岡・馬場（1938）図版 6 －21，馬場（1939a）第 41 図 14]，「鳥の嘴を加工した製品」1 点［岡・馬場（1938）図版 6 －22]，「燕尾形の骨銛？」1 点［岡・馬場（1938）図版 6 －23]，器種不明の骨角器 3 点［岡・馬場（1938）図版 6 － 6，24，25］が出土した。また，十数点の完全に近いイヌの下顎骨も出土している。

遺物の出土状況：文化層は，「地表面下約 25 cm 面」，「床面」，「貝層（ｆ）」に分けられる。

① 「地表面下約 25 cm 面」：内耳土器片が張り出し部の通路で出土している。石斧 1 点と「石鏃」2 点が住居南壁中央部付近で出土している。

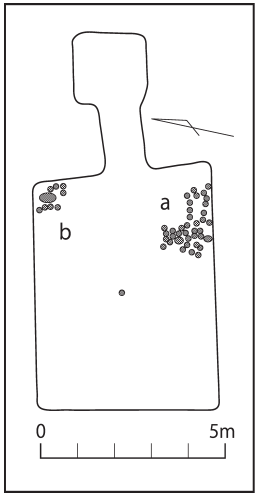
② 「床面」：張り出し部では，十字状の先端部南壁付近で大型の内耳土器片のなかの「1 片」が出土し，長い通路で大型の内耳土器片のなかの「1 片」，石銛 1 点，有柄石器 1 点［岡・馬場（1938）図版 5 －15]，石斧 1 点［岡・馬場（1938）図版 5 － 4，馬場（1939a）第 38 図 3]，敲石 1 点が出土している。住居本体においては北壁中央部付近において有柄石器 2 点［岡・馬場（1938）図版 5 － 9，14，馬場（1939a）第 38 図 7 ］が出土している。配石遺構（ａ）付近の南壁沿いにおいて，有柄石器 1 点［岡・馬場 (1938) 図版 5 － 7，馬場 (1939 a) 第 38 図 6]，石斧 1 点［岡・馬場（1938）図版 5 － 3 ］が出土した。配石遺構（ｂ）付近でも有柄石器 2 点［岡・馬場（1938）図版 5 － 5，10，馬場（1939a）第 38 図 8 ］が出土している。

③ 「貝層（ｆ）」：「石鏃」1 点と「石器」1 点，そして住居内で発見された全骨角器類 25 点が出土した。

g）占守島・別飛第二号竪穴（1937 年調査）（岡・馬場 1938，馬場 1939a）（第 8 図）

立地：別飛第二号竪穴（1936 年調査）よりも潮見川よりの台地上に位置する。別所沼を見下ろす地点である。

住居の形態と規格：張り出し部を有する，長方形の平面形の竪穴である。張り出し部は，方形を呈する先端部の小室と通路部により構成されている。張り出し部を含めた住居の長さは約 10.5 m，張り出し部をのぞく住居の長さは約 6.5 m，幅は 5 m，深さは 90 cm（発掘前約 60 cm，床面まで 30 cm）である。張り出し部の小室は長さ・幅とも 2 m であり，通路部は長さ約 2 m，幅 1.3 m である。



第 8 図　占守島別飛第二号竪穴平面図［馬場（1938）第 9 図を一部変更］

住居内の遺構：配石遺構 2 ヶ所が確認された。配石遺構（a）は，前方壁側の南壁沿いに位置しており，東西 1.8 m の範囲において規則的に小石が配置されている。四角形状に配石がされているところもある。配石遺構（b）は，前方壁と北壁が成す隅に位置しており，径約 30 m の礫周辺に拳大の小石が数個配置されている。

出土遺物：有柄石器 1 点［岡・馬場（1938）図版 7 － 3，馬場（1939a）第 38 図 10］，「石器未製品」 1 点が出土している。

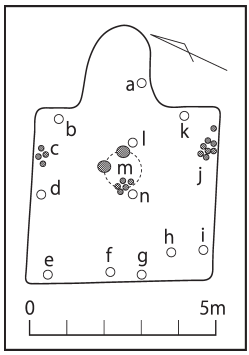
遺物の出土状況：有柄石器は配石遺構（a）付近に出土し，「石器未製品」は，後方壁付近に出土している。

h）占守島・別飛第五号竪穴（岡・馬場 1938，馬場 1939a）（第 9 図）

立地：別飛第一号竪穴（1937 年調査）から約 20 m 離れた，別飛のアレキサンドル丘よりに位置する。

住居の形態と規：張り出し部を有し，プランが方形を呈する竪穴である。張

り出し部をふくむ住居の長さは約 7 m，張り出し部をのぞく住居の長さは約 4.7 m，幅は約 5 m，深さは 95 cm（発掘前 60 cm，床面まで 35 cm）である。張り出し部の長さは約 2.3 m，幅は約 2 m，深さは 0.7 m である。



第 9 図　占守島別飛第五号竪穴平面図［馬場（1938）第 14 図を一部変更］

住居内の遺構：配石遺構 2 ヶ所，炉跡状遺構 1 基，柱穴 11 基が確認された。配石遺構（ｃ）は北壁沿いに位置しており，１×１m の範囲に小石が不規則に配置されている。配石遺構（ｊ）は配石遺構（ｃ）の反対側の南壁沿いに位置しており，１×１m の範囲に小石が不規則に配置されている。炉跡状遺構（m）は住居中央部に位置しており，径約 20 cm の 3 つの礫[12] と柱穴（ｎ）付近の小石の集積で構成されている。１×１m の範囲で赤褐色化した土壌と，浅いくぼみも確認された。柱穴は，住居壁沿いと中央部に配置されている。柱穴のサイズをみてみると，柱穴（ｂ）は径 20 cm，深さ 40 cm，柱穴（ｄ）は径 25 cm，深さ 30 cm，柱穴（ｅ）は径 15 cm，深さ 30 cm，柱穴（ｆ）は径 10 cm，深さ 25 cm，柱穴（ｇ）は径 7 cm，深さ 45 cm，柱穴（ｈ）は径 25 cm，深さ 40 cm，柱穴（ｉ）は径 24 cm，深さ 40 cm，柱穴（ｋ）は径 15 cm，深さ 25 cm，柱穴（ｌ）は径 17 cm，深さ 35 cm，柱穴（ｎ）は径 25 cm，深さ 25 cm である。なお，柱穴（ａ）のサイズについては記述がない。

出土遺物：内耳土器片数点[13]，石斧 1 点［岡・馬場（1938）図版 11－２，馬場（1939a）第 38 図 4］，削器 2 点［岡・馬場（1938）図版 11－５，６，馬場（1939a）第 38 図 12］，有柄石器 1 点［岡・馬場（1938）図版 11－３，馬場（1939a）第 38 図 9］，両面調整石器 1 点［岡・馬場（1938）図版 11－７］，「腐蝕したマキリ状鉄片」１点［岡・馬場（1938）図版 11－12］，「金属片」数点，「青色ガラス玉」１点［岡・馬場（1938）図版 11－11 上段］，「南京玉」１点［岡・馬場（1938）図版 11－11 中段］，「緑色ガラス玉」１点［岡・馬場（1938）図版 11－11 下段］，「骨製中柄」3 点［岡・馬場（1938）

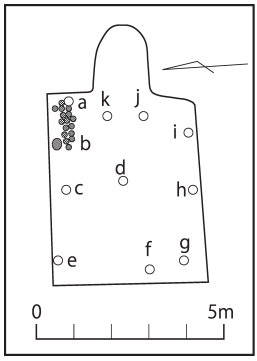
図版 11－10，馬場 1939a：第 41 図 10］，その他石器・骨角器数点が出土している。また，人骨（頭蓋骨）も出土した。

遺物の出土状況：張り出し部では，内耳土器片（点数不明），有柄石器，削器［岡・馬場（1938）図版 11－ 6 ］，「骨製中柄」が出土している。住居内部では北西隅の柱穴（ｂ）付近で「緑色ガラス玉」が，南東隅の柱穴（ｋ）付近で「青色ガラス玉」と「南京玉」が出土した。後方壁中央部沿いで石斧が出土し，西南隅付近で削器［岡・馬場（1938）図版 11－ 5，馬場（1939a）第 38 図 12］と「腐蝕したマキリ状鉄片」が出土している。炉跡状遺構（m）周辺で内耳土器片（点数不明）が出土している。２つの配石遺構（ｃ，ｊ）からはともに「金属片」が出土し，配石遺構（ｊ）では更に両面調整石器が出土した。

ｉ）占守島・別飛第六号竪穴（岡・馬場 1938，馬場 1939a）（第 10 図）

立地：別飛第一号竪穴（1937 年調査）から約 30 m 離れた，別所池よりに位置する。

住居の形態と規格：張り出し部を有し，長方形の平面形を呈する竪穴である。住居の長さは張り出し部を含めて約 7 m，張り出し部をのぞくと長さ約 5 m，幅 4 m，深さは約 90 cm（発掘前約 50 cm，床面まで約 40 cm）である。張り出し部の長さは約 2 m，幅が約 1.5 m，深さが約 63 cm（発掘前約 23 cm，床面まで約 40 cm）である。張り出し部から住居主体部へ進むにつれて深くなる。



第 10 図　占守島別飛第六号竪穴平面図［馬場（1938）第 15 図を一部変更］

住居内の遺構：配石遺構 1 ヶ所と柱穴 10 基が確認された。配石遺構（ｂ）は北東隅に位置しており，約 1.4×0.3 m の範囲に径 10 cm の小石が配置されている。柱穴は基本的には住居壁沿いに配置されている。柱穴（ａ）は径 15 cm，深さ 42 cm，柱穴（ｃ）は径 20 cm，深さ 40 cm，

柱穴（e）は径 17 cm，深さ 39 cm，柱穴（f）は径 15 cm，深さ 45 cm，柱穴（g）は径 20 cm，深さ 50 cm，柱穴（h）は径 20 cm，深さ 38 cm，柱穴（i）は径 15 cm，深さ 42 cm，柱穴（j）は径 15 cm，深さ 60 cm，柱穴（k）は径 15 cm，深さ 53 cm である。

出土遺物：「石鏃」1 点［岡・馬場（1938）図版 12－11，馬場（1939a）第 38 図 15］，有柄石器 6 点［岡・馬場（1938）図版 12－ 3 － 7， 9，馬場（1939a）第 38 図 16］，掻器 1 点［岡・馬場（1938）図版 12－10］，砥石 1 点［岡・馬場（1938）図版 12－ 8 ］，そのほか破損した骨器数点が出土している。

遺物の出土状況：張り出し部と住居主体部の境界付近で，有柄石器［岡・馬場（1938）図版 12－ 9 ］が出土している。住居前方壁付近で，有柄石器 2 点［岡・馬場（1938）図版 12－ 3， 5］が出土している。南壁沿いにおいて，柱穴（i）付近で砥石が出土し，柱穴（h）付近で「石鏃」が出土している。後方壁付近で有柄石器 2 点［岡・馬場（1938）図版 12－ 6， 7，馬場（1939a）第 38 図 16］が出土している。

j）幌筵島・樺里第十号竪穴（馬場 1940）（第 11 図）

立地：立地に関する記載はない。

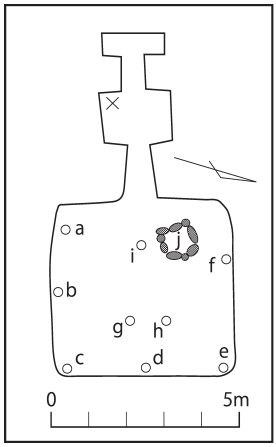
住居の形態と規格：T 字状の張り出し部を有し，小型の第 1 室と第 2 室を細長い通路により連結している竪穴である。第 1 ・ 2 室ともに平面形は方形である。住居の長さは，張り出し部を含めて約 9 m である。小型の第 1 室は長さが 1.5 m，幅が 2 m，住居本体となる第 2 室は長さが 4.7 m，幅が 4.8 m で，深さに関しては 26 cm ほどで床面に到達したという。第 1 ・ 2 室をつなぐ通路は，長さが約 1.6 m，幅が約 1 m である。

住居内の遺構：第 2 室から石組炉 1 基，柱材が一部残存する柱穴 3 基，柱穴 6 基が確認された。石組炉（j）は前方壁沿いの北よりに位置し，数個の礫を用いて構築されている。直径は約 1 m であり，掘り込みは深さ約 2 cm である。炉の底部には炭化物や灰が少量確認された。柱穴は規則正しく配置されている。住居壁沿いの柱穴 6 基（a， b， c， d， e， f）と住居中央部の柱穴 3 基（g， h， i）により構成されている。なお，柱穴のサ

イズについては記述がない。

出土遺物：完形の内耳土器1点が出土している。

遺物の出土状況：第1室の前方壁と南壁が成す隅で，内耳土器が破砕された状態で出土した（地点×）。



第11図　幌筵島樺里第十号竪穴平面図［馬場（1940）第47図を一部変更］

3．土器

⑴　内耳土器の特徴

馬場コレクション中には北千島出土の内耳土器が20点含まれており，第12〜16図に全点を図示した。また，参考資料として第17•18図に市立函館博物館所蔵のサハリン島出土内耳土器5点，出土地不明の内耳土器1点の図面も掲載した。標本番号や出土地の詳細，初出報告との対応関係については第1表を参照願いたい。おおよそ出土地点ごとに図示しているので，以下では図版の順序にしたがって各資料の特徴を記載する。

第12図1〜5は占守島潮見川出土［報告（岡•馬場1938）では潮見川第一号竪穴］の内耳土器である。1は一部が石膏で復元されているがほぼ完形の内耳土器で，口縁部内面に比較的小さな4つの内耳をもつ。器壁は直線的に立ち上がり，口縁部外面に段がめぐる。段に対応する位置の内面側では，隆帯によって口縁部と胴部の境界が区切られている。外面には炭化物が厚く付着している。2も一部が石膏で復元されており，直径は15 cmに満たない小型の内耳土器である。サイズが小さいことが影響してか，内耳の数は2個と少なく，北千島・カムチャツカ地域ではめずらしい資料のひとつである。3〜5は同一個体の可能性がある口縁部破片である。器壁が薄く，口縁部は段を形成して外側に張り出し，それに対応して内面は幅が広く，浅い「溝」が形作られている。内耳は比較的小さなものが細い粘土紐で作出されており，孔の直径も小さい。また，とくに4・5の内耳頂部は，丸みをおびずにやや

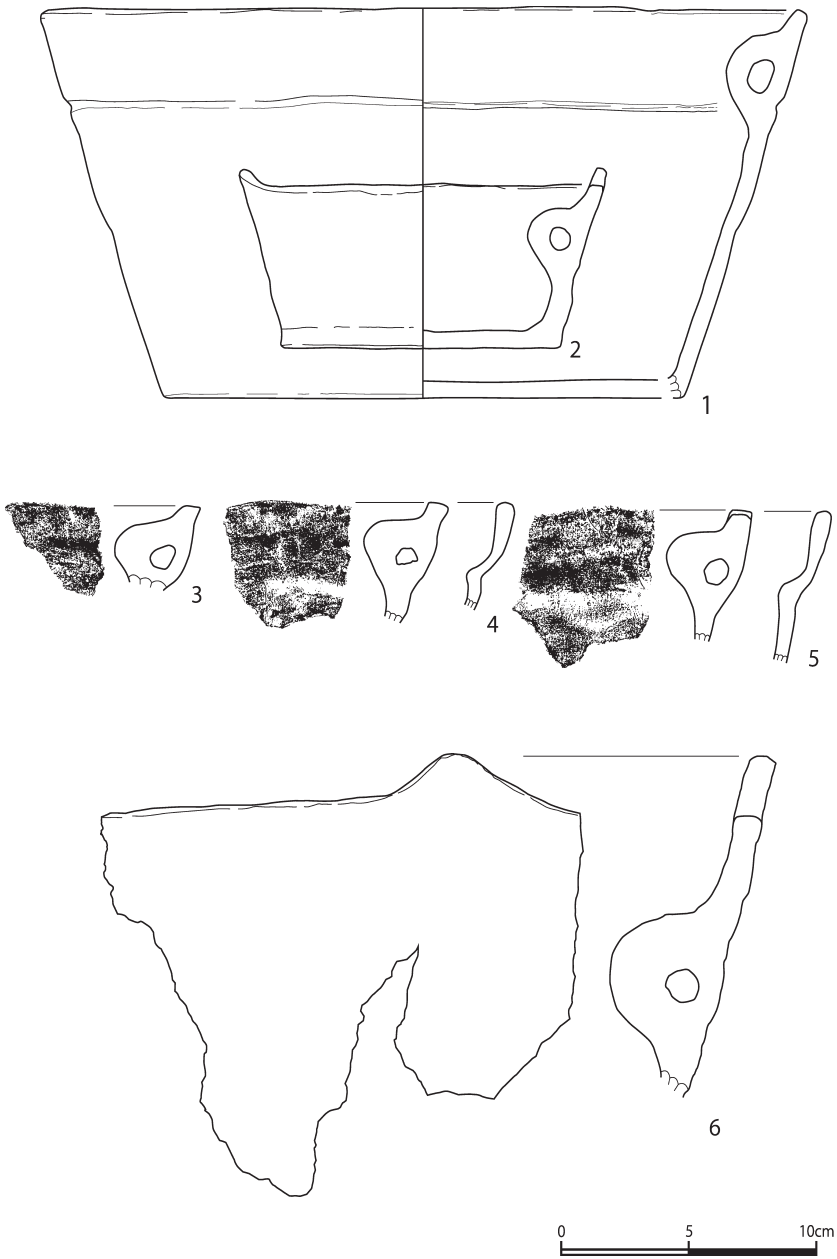
尖っている。6は占守島片岡出土の内耳土器片で，口縁部には三角形の突起があり，口縁端部からかなり下がった位置に大きな内耳が付されている。

第13図1・2は，及川一号竪穴出土資料で，ともに口縁部に比較的小さな三角形の突起がみられる。外面には厚い付着炭化物が認められる。1の内面には大きな内耳が付されており，それに対応する箇所の外面側は大きく盛り上がる。外面には爪形のモチーフを横位に配した文様がみられ，内面ではそれに対応する位置がやや盛り上がる。2は口縁と胴部の境界付近に段というよりも溝にちかい凹部が認められ，口縁部の内面には幅広で浅い「溝」がめぐる。3は小泊砂丘［報告（岡・馬場1938）では「小泊貝塚」］，4は別飛一号竪穴（1937年調査）と出土位置はそれぞれ異なるが，ともに内耳が大きく，その外面側は盛り上がりがある点で共通している。

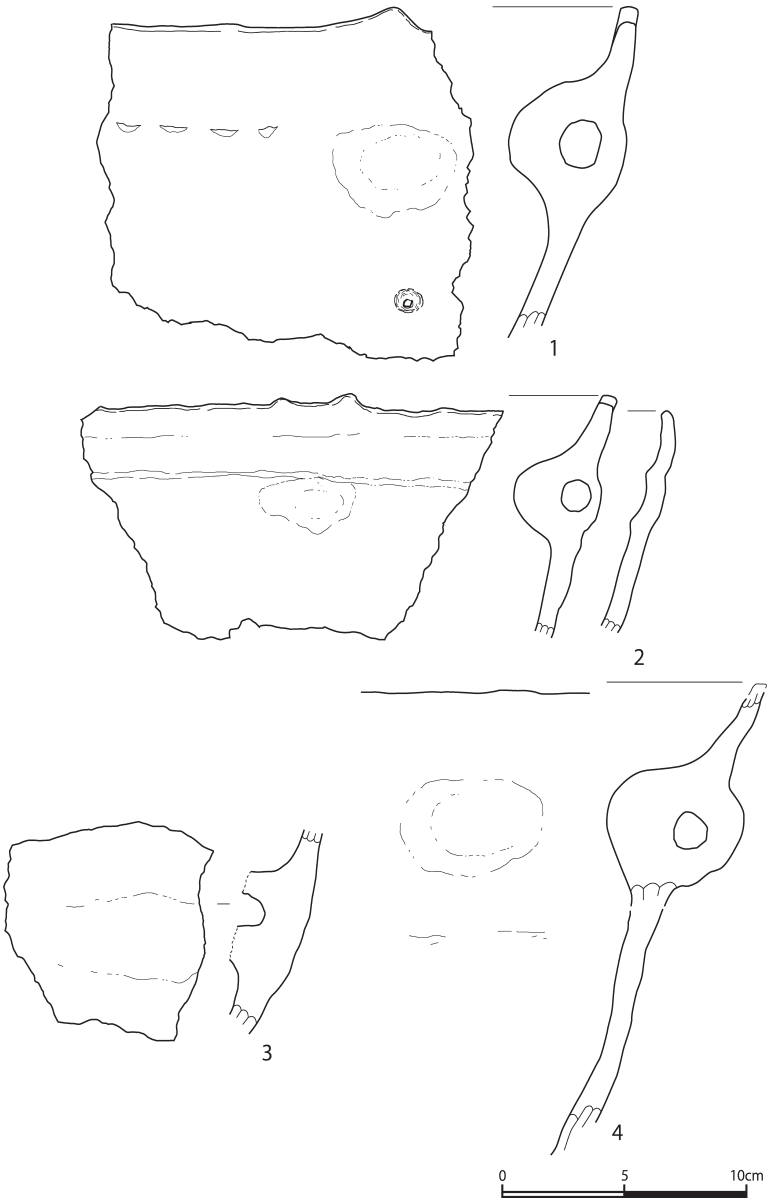
第14〜15図は，すべて占守島別飛出土である。第14図1は内耳の一部が欠損しているが，大きな内耳とそれに対応する外面側の盛り上がりがある点で第13図3・4と類似する。第14図3もこれと共通性が高いが，口縁端部に低台形状の突起をもつ点，口縁部外面に1条の沈線が横走する点は特徴的である。第14図2も大きな内耳をもつ内耳土器である。口縁部外面側の盛り上がりは不明瞭であるが，口胴境界付近に段とまではいえない不明瞭な高低差がある。

第15図1［別飛二号竪穴（1936年調査）］には低台形状の突起，大きな内耳，内耳に対応する位置の外面側の盛り上がりがあり，器壁も厚い。外面には炭化物が厚く付着しているが，爪形のモチーフを上下2列に配した文様が確認できる。2・3の内耳は大きいが器壁は比較的薄く，口縁部内面には幅広で浅い「溝」が明確に作り出されている。4は大きな内耳の破片で，器壁への接着面から剝がれ落ちたものと見られる。

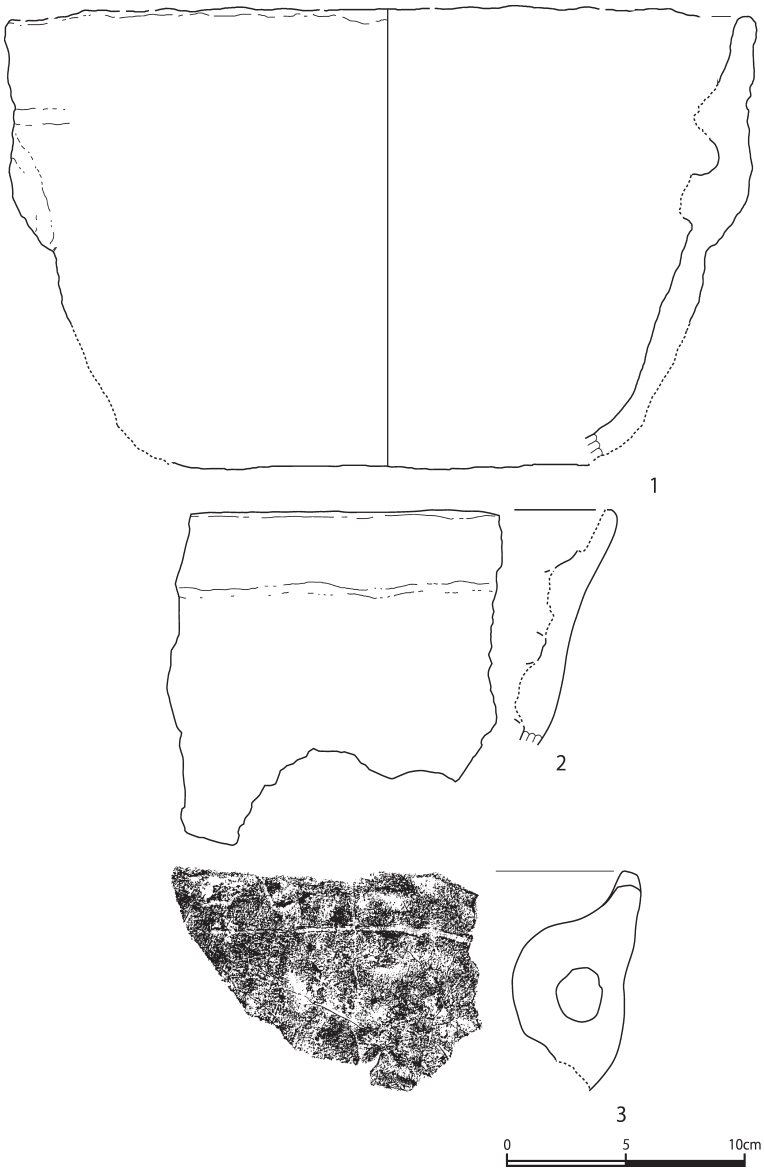
第16図1・3は口縁部に大きな山形突起（あるいは波状口縁気味になる可能性もある）がみられ，突起の内部はさらに小さな3つの突起に分かれる。器壁は厚く，内耳も大きい。とくに3で外面側の盛り上がりが顕著である。2の器壁は厚いが内耳は小さく，口縁内面には「溝」もみられる。内耳付着部分の外面側には盛り上がりがあり，それ以外は不明瞭な凹部が口胴境界付



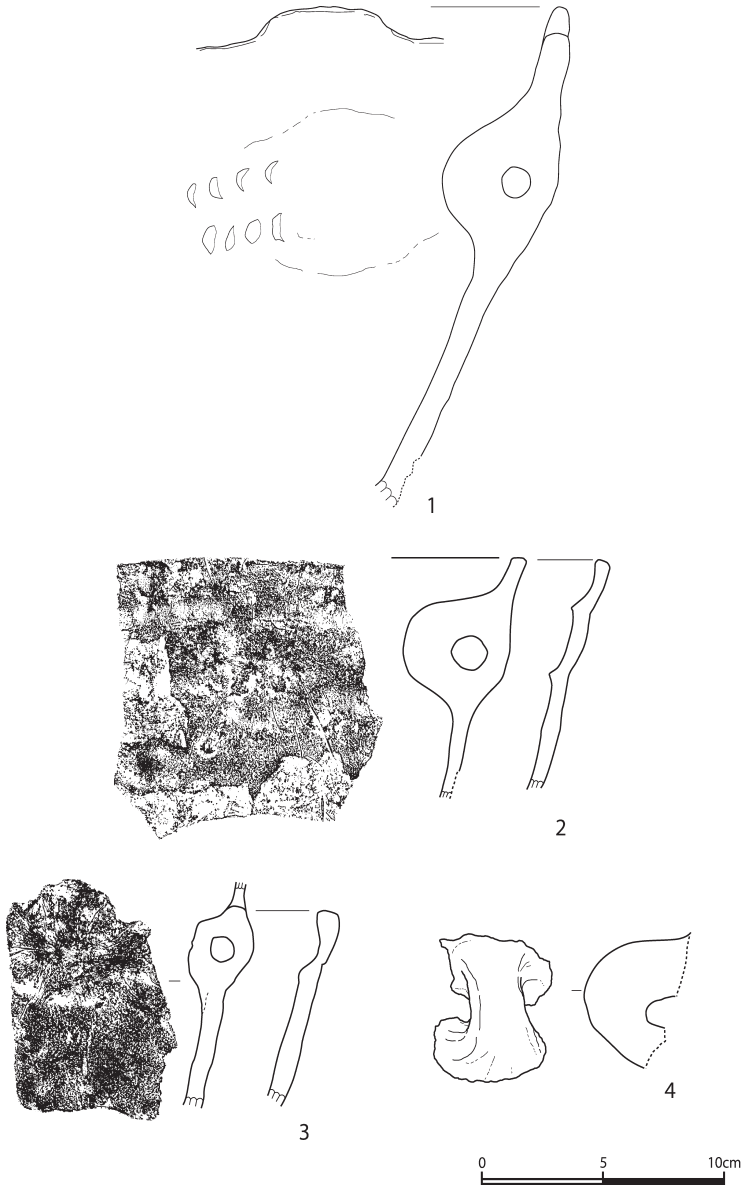
第 12 図　内耳土器(1)［1・2 ：占守島潮見川，3 ― 5 ：占守島潮見川第一号竪穴，6 ：占守島片岡］



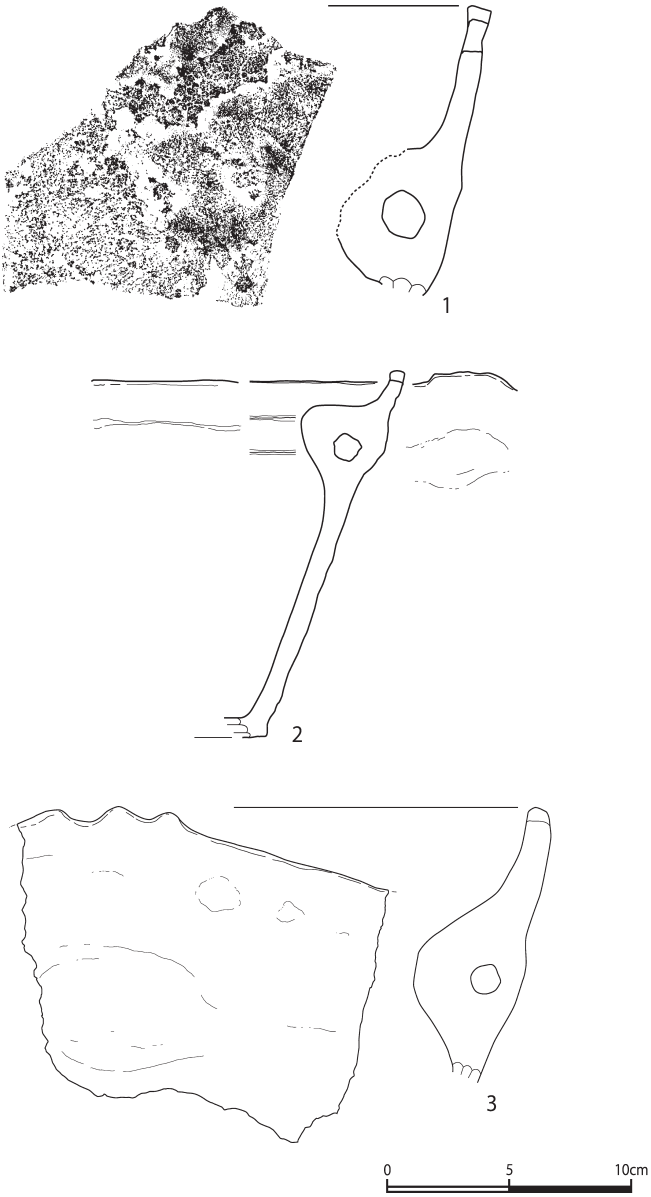
第 13 図　内耳土器(2)[1 ：占守島及川第一号竪穴，2 ：占守島及川第八号竪穴，3 ：占守島小泊砂丘，4 ：占守島別飛第一号竪穴]



第 14 図　内耳土器(3)［1・2：占守島別飛「旧土人墓地裏」，3：占守島「別飛川右岸の丘」］



第 15 図　内耳土器(4)[1 ：占守島別飛第二号竪穴，2 ：占守島別飛「別所漁場裏手付近の石原」，3 占守島別飛第二貝塚　別飛「旧土人墓地裏手砂丘」，4 ：占守島別飛貝塚]

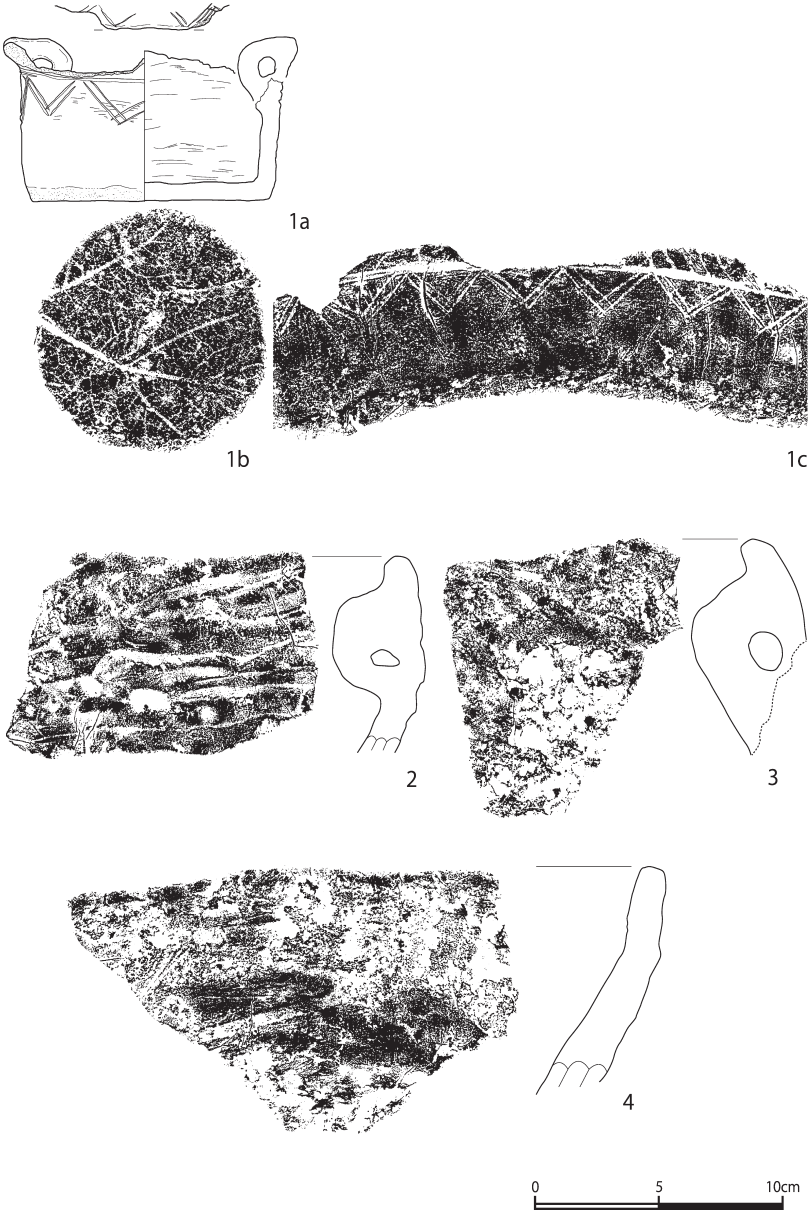


第 16 図　内耳土器(5)[1 ：占守島別飛，2 ：占守島別飛川丘下，3 ：占守島別飛]

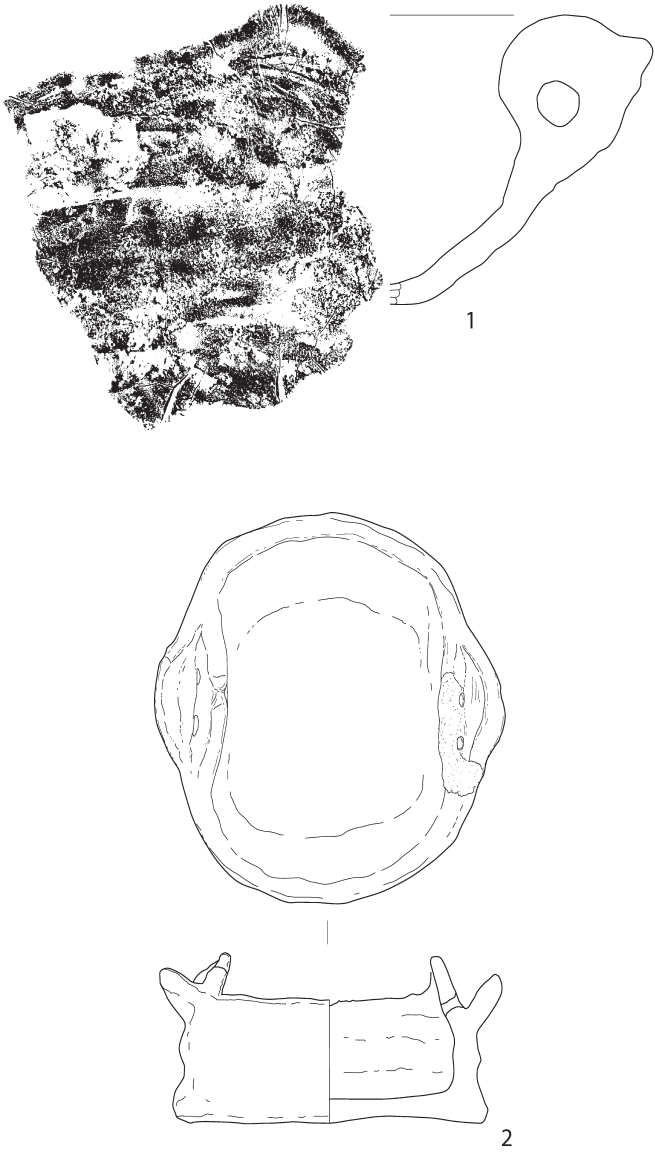
近にめぐっている。

第 17 図 1 は出土地不明の内耳土器で，収蔵資料目録（市立函館博物館 1994）では備考欄に「道東？」との記載がある資料である。内耳土器に鋸歯文がみられることから，擦文文化期の土器の最終段階と内耳土器の時間的接点をしめす資料としてすでに図面が紹介されてきており（宇田川 1977，1979，1988 など），収蔵資料目録（市立函館博物館 1994）において写真も公表されている。口径は 11.6 cm と非常に小さく，底面には木葉圧痕が認められる。口胴境界に引かれた 1 本の横走沈線の下部に鋸歯文が 2 本一組の沈線によって描かれている。これまで公表されてきた図面・写真では必ずしも明らかになっていなかったが，同様の鋸歯文は不明瞭ながら口縁内面にも施されている。口縁部の大部分は欠損しているが，残存部分からは口縁部が開く器形になることが明らかである。 2 〜 4 はサハリン島南半出土（遠内・富内・深草）の内耳土器である。 2 は器壁に輪積痕を明瞭にのこす資料で，口縁部外面の一部に炭化物が若干付着しているほかは，炭化物の明確な付着はみられない。輪積痕がのこる類例はサハリン島においても一般的ではないが散見されるため，今後，地域差や時期差をとらえる指標となる可能性がある。 3 は外面の一部が剝落している無文の内耳土器片である。口縁部の内外面に付着炭化物が認められるが，胴部以下に付着炭化物は確認できない。 4 は無文の内耳土器で，口縁部が大きく開く器形を呈する可能性が高い。 3 と同じように，口縁部に近い位置の内外面には炭化物が付着するが，胴部以下には炭化物が付着していない。北千島・カムチャツカとは，使用方法が異なっていた可能性を強く示唆している。

第 18 図 1・2 もサハリン島南部の深草・大泊から出土した資料である。 1 は，口胴境界が不明瞭な沈線で区画された無文の内耳土器片である。やはり，胴部以下には付着炭化物が認められない。 2 は 2 個の袋耳（ 2 孔）をもつ小型の内耳土器である。馬場（1940）によれば，もともと市立函館図書館附属民族館に保管されていた資料である。口径よりも底径が大きく，上面観は楕円形を呈する。袋耳の高さは器壁の最大高よりも高く，しかも袋耳頂部には 1 個の山形突起が付されている。内面には付着炭化物はほとんどみられない



第 17 図　内耳土器(6)[1 ：出土地不明，2 ：サハリン島遠内，3 ：サハリン島富内，4 ：サハリン島深草]



第 18 図　内耳土器(7)[1 ：サハリン島深草，2 ：サハリン島大泊]

第 1 表　内耳土器一覧

図版番号	収蔵機関資料番号	資料名	採集地域	注記・遺跡名・初出文献など
第 12 図 1	1800	内耳土器	占守島	潮見川（岡・馬場 1938 図版二－ 1，報告（岡・馬場 1938）では潮見川第一号竪穴）
第 12 図 2	1801	内耳土器	占守島	潮見川（岡・馬場 1938 図版二－ 4，報告（岡・馬場 1938）では潮見川第一号竪穴）
第 12 図 3	1836	内耳土器	占守島	潮見川第一号竪穴（馬場 1940 記載のみ）
第 12 図 4	1836	内耳土器	占守島	潮見川第一号竪穴（馬場 1940 記載のみ）
第 12 図 5	1836	内耳土器	占守島	潮見川第一号竪穴（馬場 1940 記載のみ）
第 12 図 6	1827	内耳土器	占守島	片岡（馬場 1940 第三十七図）
第 13 図 1	1818	内耳土器	占守島	及川第一号竪穴（馬場 1940 第三十九図右）
第 13 図 2	1818	内耳土器	占守島	及川第八号竪穴（馬場 1940 第四十図の一部）
第 13 図 3	1831	内耳土器	占守島	小泊砂丘（岡・馬場 1938 図版十五下段－ 1，報告（岡・馬場 1938）では小泊貝塚）
第 13 図 4	1845	内耳土器	占守島	別飛第一号竪穴（岡・馬場 1938 図版五－ 8）
第 14 図 1	1845	内耳土器	占守島	別飛「旧土人墓地裏」
第 14 図 2	1845	内耳土器	占守島	別飛「旧土人墓地裏」（馬場 1940 第三十図）
第 14 図 3	1845	内耳土器	占守島	「別飛川右岸の丘」（馬場 1940 第二十八図）
第 15 図 1	1845	内耳土器	占守島	別飛第二号竪穴（1936 年調査）（馬場 1940 第三十一図右）
第 15 図 2	1845	内耳土器	占守島	別飛「別所漁場裏手付近の石原」（馬場 1940 第二十六図）
第 15 図 3	1845	内耳土器	占守島	別飛第二貝塚,「旧土人墓地裏手砂丘」（馬場 1934 第 9 図右）
第 15 図 4	1845	内耳土器	占守島	別飛貝塚
第 16 図 1	1845	内耳土器	占守島	別飛（馬場 1940 第二十四図）
第 16 図 2	1845	内耳土器	占守島	別飛川丘下（馬場 1940 第二十九図,「別飛川右岸」）
第 16 図 3	1802	内耳土器	占守島	別飛
第 17 図 1	2024	内耳土器	不　明	不明
第 17 図 2	1751	内耳土器	サハリン島	遠内（馬場 1940 第十九図）
第 17 図 3	1763	内耳土器	サハリン島	富内
第 17 図 4	1750	内耳土器	サハリン島	深草
第 18 図 1	1750	内耳土器	サハリン島	深草
第 18 図 2	1738	内耳土器	サハリン島	大泊（馬場 1940 第十八図,「大泊附近出土？」）

が，外面は口縁部から底部まで厚い炭化物に覆われている。

4．石器

市立函館博物館収蔵の馬場コレクションにおける北千島出土の石器資料は，計 157 点である。このうち，本稿における検討対象は馬場編年「第二期」に属する竪穴住居出土の 38 点である。馬場が報告しているにもかかわらず現

在の収蔵資料には確認できない石器資料は 6 点であり，逆に報告されてはいないが存在が確認できた資料が 11 点ある。

石器が出土した竪穴住居は，占守島「及川第四号，第八号竪穴」，「潮見川第一号，第二号竪穴」，「別飛第一号，第二号竪穴（1937 年調査）」，「別飛第五号，第六号竪穴」，幌筵島が「樺里第十号竪穴」の計 9 軒である。

a）占守島・及川第四号竪穴出土石器

及川第四号竪穴出土石器は 1 点確認された。器種は石斧（第 19 図 2）である。器体正面・裏面とも剝離痕で構成されているが，器体両面に研磨された面が部分的に残されていることから，当初，磨製石斧であったものが使用あるいは器体調整を繰り返すことにより打製石斧になったことが想定される。刃部には，正面・裏面ともに激しい階段状の剝離痕が残っている。器体最大長[14] は 10.6 cm で，大型の石斧に分類される。岩石は玄武岩が用いられている。

b）占守島・及川第八号竪穴出土石器

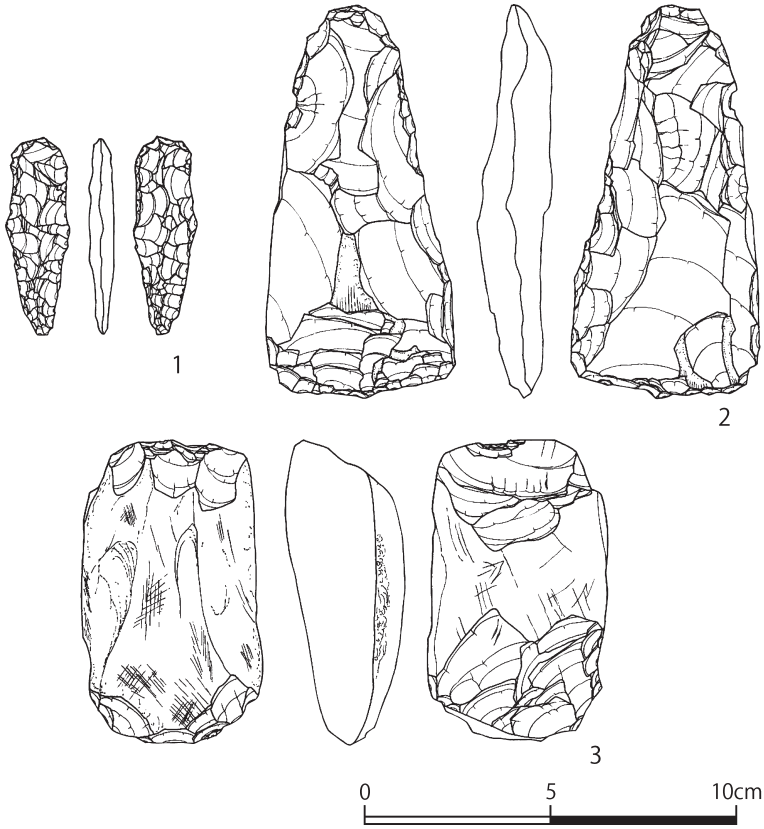
及川第八号竪穴出土の石器は 1 点を実見することができる。器種は有柄石器[15]（第 19 図 1）である。両面加工により整形され，体部が柄部よりも細く作り出されており，両者の長さはほぼ等しい。器体長は 5.3 cm と中型に分類され，メノウ製である。

c）占守島・潮見川第一号竪穴出土石器

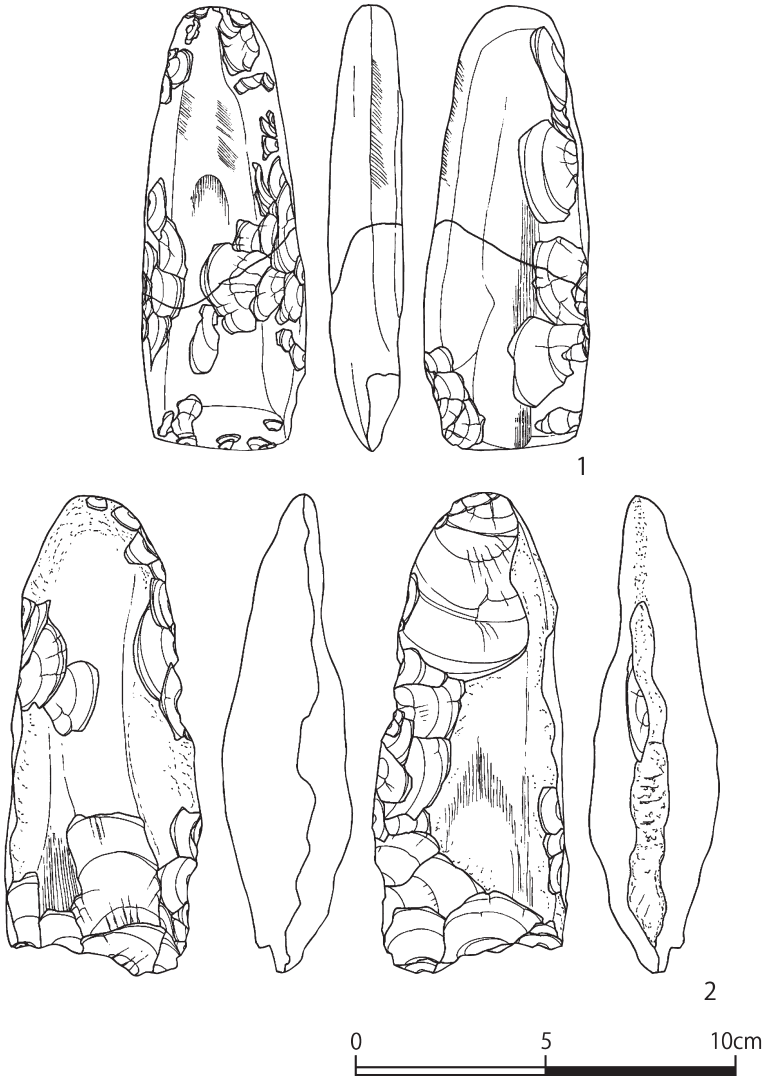
潮見川第一号竪穴出土の石器は，石斧 2 点（第 20 図 1， 2）を実見できた。ともに研磨によって基本的な整形が行われているが，所々に剝離痕が確認される。器体長は第 20 図 1 が 11.6 cm，第 20 図 2 が 12.6 cm で，どちらも大型である。固定具との関係において生じたと考えられる剝離痕・磨滅痕等が双方の器体両側縁に観察される。断面形は第 20 図 1 が四角形，第 20 図 2 が厚みのある楕円形を呈する。どちらも安山岩製である。

d）占守島・潮見川第二号竪穴出土石器

潮見川第二号竪穴出土の石器として，１点の楔形石器が確認された（第 19 図 3）。この資料は報告のなかで記述されてはいるが（岡・馬場 1938，馬場 1939a），写真・図面は提示されてきてはいない。厚さが 3.2 cm と厚く，磨製石斧が両極打撃法により楔形石器に転用されたものと考えられる。器体下端には激しい磨滅痕が，器体正面・裏面には激しい擦痕が観察され，使用時にうける衝撃が大きかったことが想定される。器体の両側面には明確な磨滅痕



第 19 図　石器(1)［1：占守島及川第八号竪穴，2：占守島及川第四号竪穴，3：占守島潮見川第二号竪穴］



第 20 図　石器(2)［1・2：占守島潮見川第一号竪穴］

も観察され，石斧として使用されていた段階においては固定具が用いられていたと考えられる。長さは 8 cm であるが，当初の石斧は大型であったと想定される。岩石は安山岩が用いられている。

e）占守島・別飛第一号竪穴（1937 年調査）出土石器

別飛第一号竪穴出土の石器は，未報告 8 点（第 21 図 1，第 22 図 1， 4，5，第 23 図 2）をふくむ計 19 点が確認された。うち第 21〜23 図に 16 点を図示している。19 点の内訳は，剝片石器が有柄石器 10 点（第 21 図 1 〜 6，第 22 図 1， 2），石銛 1 点（第 22 図 3），掻器 1 点（第 22 図 4），二次加工ある剝片 1 点（第 22 図 5）で，礫石器が石斧 5 点（第 22 図 6 〜 8，第 23 図 2），敲石 1 点（第 23 図 1）である。なお，馬場の報告中の「石鏃」3 点［岡・馬場（1938）図版 5 −11，12，13，馬場（1939a）第 38 図 13，14］と「石器」1 点［岡・馬場（1938）図版 5 −16］は確認することができなかった。

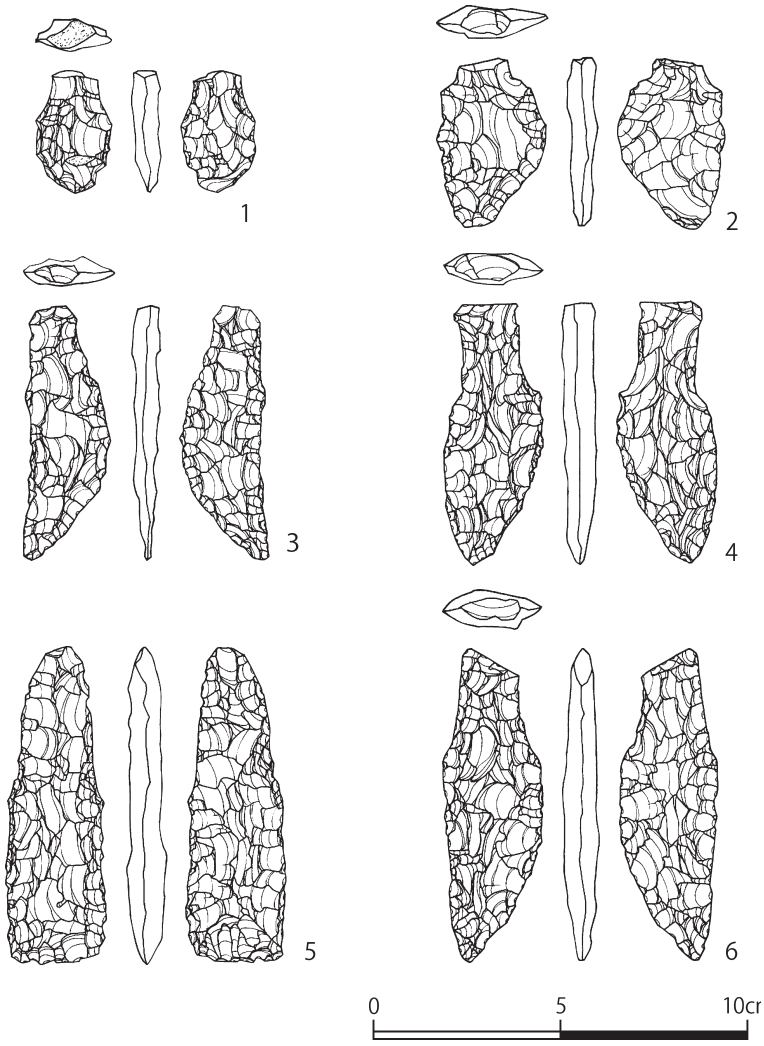
有柄石器は，柄部のみの破損品 2 点もふくむ計 10 点が確認されている。第 22 図 2 以外，すべて両面加工により整形されている。平面形はすべて左右非対称で，尖頭状の刃部をもつもの（第 21 図 2 〜 4， 6，第 22 図 2），弧状の刃部をもつもの（第 21 図 1，第 22 図 1），直線的な刃部をもつもの（第 21 図 5）に分類される。石器のサイズは中型であるが，第 21 図 5 や第 21 図 6 などは最大長が 8 cm を超えており大きい。岩石はチャート（第 21 図 2， 5，第 22 図 1），黒曜石（第 21 図 6），メノウ（第 21 図 1， 3， 4，第 22 図 2）が用いられている。

第 22 図 3 の石銛は，両面加工により整形され，尖頭部と茎部が精巧に作り出されている。左右対称の平面形を呈する。チャート製である。

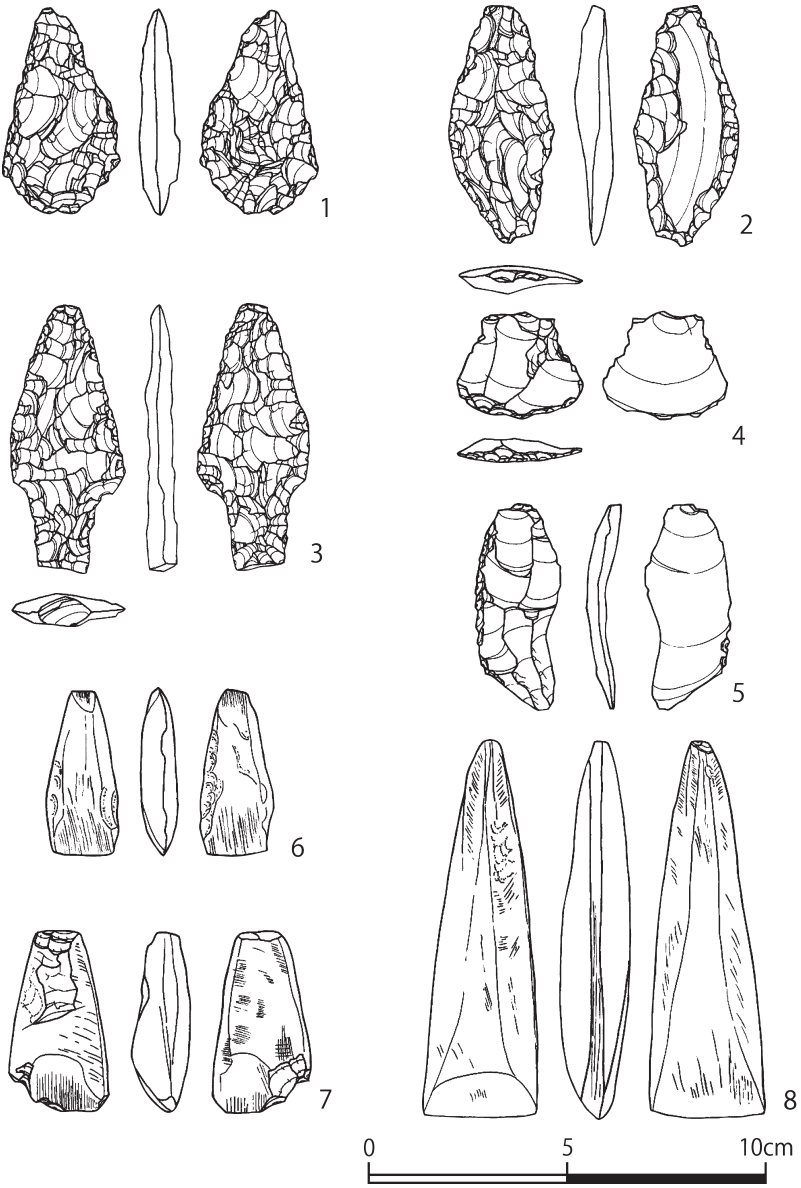
第 22 図 4 の掻器はメノウ製で，弧状に張り出す刃部をもつ。刃角の大きな刃部が作出されており，刃部中央部の刃角は 74 度である。

第 22 図 5 の二次加工ある剝片は，縦長の剝片を素材として製作されており，器体正面左側縁に調整あるいは使用による細かな剝離痕が認められる。チャート製である。

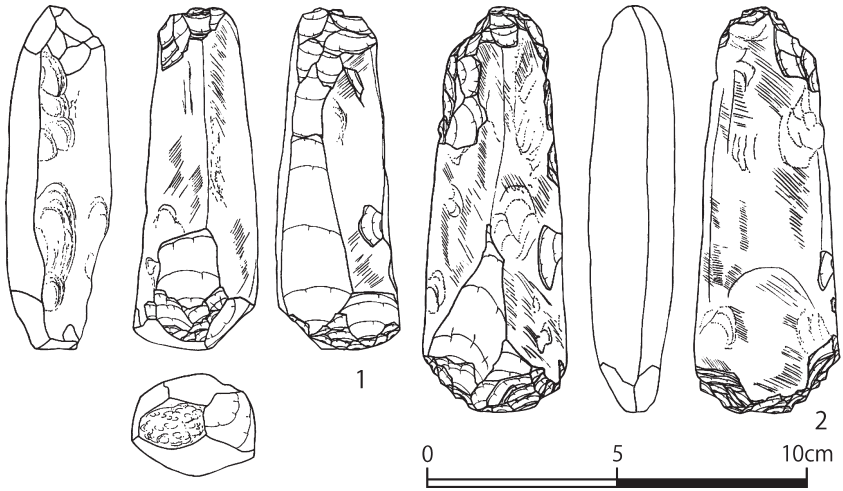
石斧は，破損品 1 点をふくむ 5 点が確認された。すべて磨製であるが，第



第 21 図　石器(3)［1 ― 6 ：占守島別飛第一号竪穴］



第 22 図　石器(4)［1 ー 8 ：占守島別飛第一号竪穴］



第 23 図　石器(5)［1 ・ 2 ：占守島別飛第一号竪穴］

23 図 2 では使用によるものと考えられる剝離痕が刃部に集中している。サイズは中型（第 22 図 8，第 23 図 2）と小型（第 22 図 6， 7）に分けられる。岩石は安山岩（第 22 図 6， 8，第 23 図 2）と凝灰岩（第 22 図 7）が用いられている。

第 23 図 1 の敲石は，器体下端の平坦面が作業面である。使用時に生じたと考えられる下端から上端への剝離痕が側面に形成されている。また，器体上端にも下端方向へ向かう剝離痕が観察される。安山岩製である。

f）占守島・別飛第二号竪穴（1937 年調査）出土石器

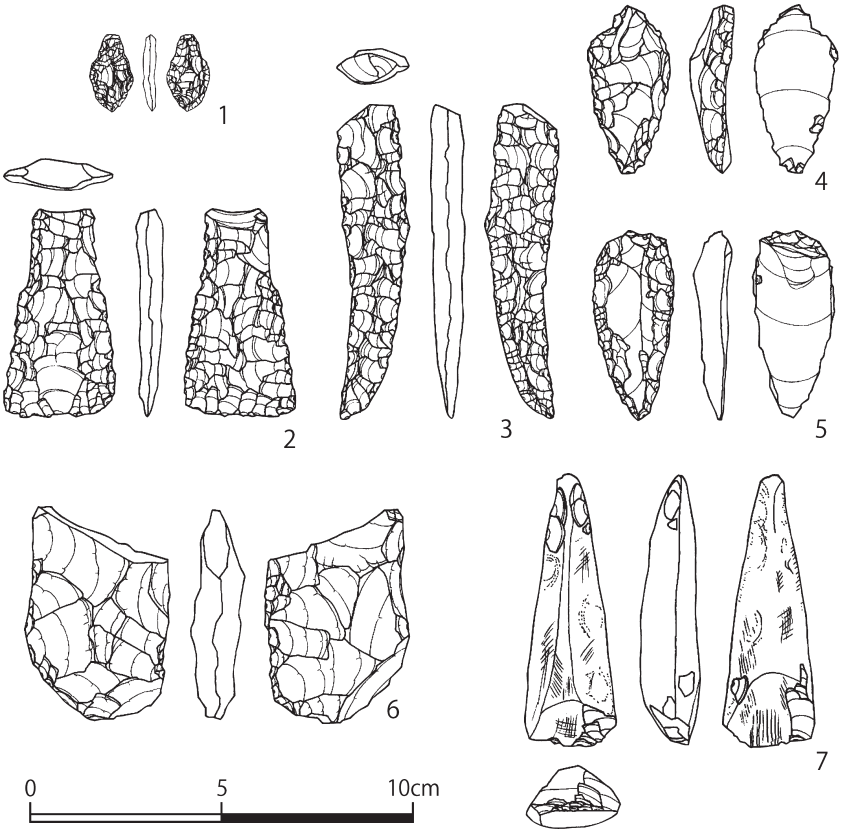
別飛第二号竪穴出土の石器は，未報告 1 点（第 24 図 1）を含む計 2 点が確認された。剝片石器のみで有柄石器 2 点（第 24 図 1， 2）である。なお，馬場の報告の中の「石器未成品」1 点（岡•馬場 1938：図版七- 4）を確認することができなかった。

有柄石器は両面加工により整形されており，石器の平面形には，左右対称を呈する尖頭状の刃部をもつもの（第 24 図 1），左右非対称を呈する直線状の刃部をもつもの（第 24 図 2）が確認された。第 24 図 1 は小型で石鏃のよ

うではあるが，茎部というよりも柄部と判断した。岩石は，メノウ(第 24 図 1)，チャート（第 24 図 2）である。

g）占守島・別飛第五竪穴出土の石器

別飛第五号竪穴出土の石器は，5 点実見することができた。剝片石器には有柄石器 1 点（第 24 図 3），削器 2 点（第 24 図 4，5），両面調整石器（第 24 図 6）があり，礫石器には石斧 1 点（第 24 図 7）がある。



第 24 図　石器(6)［1・2：占守島別飛第二号竪穴，3 ― 7：占守島別飛第五号竪穴］

第 24 図 3 の有柄石器は両面加工により整形されており，左右非対称を呈する尖頭状の刃部をもつものである。細長く作り出されているのが特徴的である。岩石はチャートである。

第 24 図 4，5 の削器は，石器素材の背面のみを整形し，平面形が左右対称を呈する尖頭部を作り出すものである。周縁部調整により二次加工を施している。岩石は共に黒曜石である。

第 24 図 6 の石器は両面調整石器と分類したが，有柄石器の柄部の可能性がある。岩石はメノウである。

第 24 図 7 の石斧は，器体調整は研磨により整形されているが，度重なる使用によるものと考えられる剝離痕が刃部に集中して観察される。器体長は 7.1 cm で中型に分類される。断面形は類三角形を呈する。岩石は安山岩である。

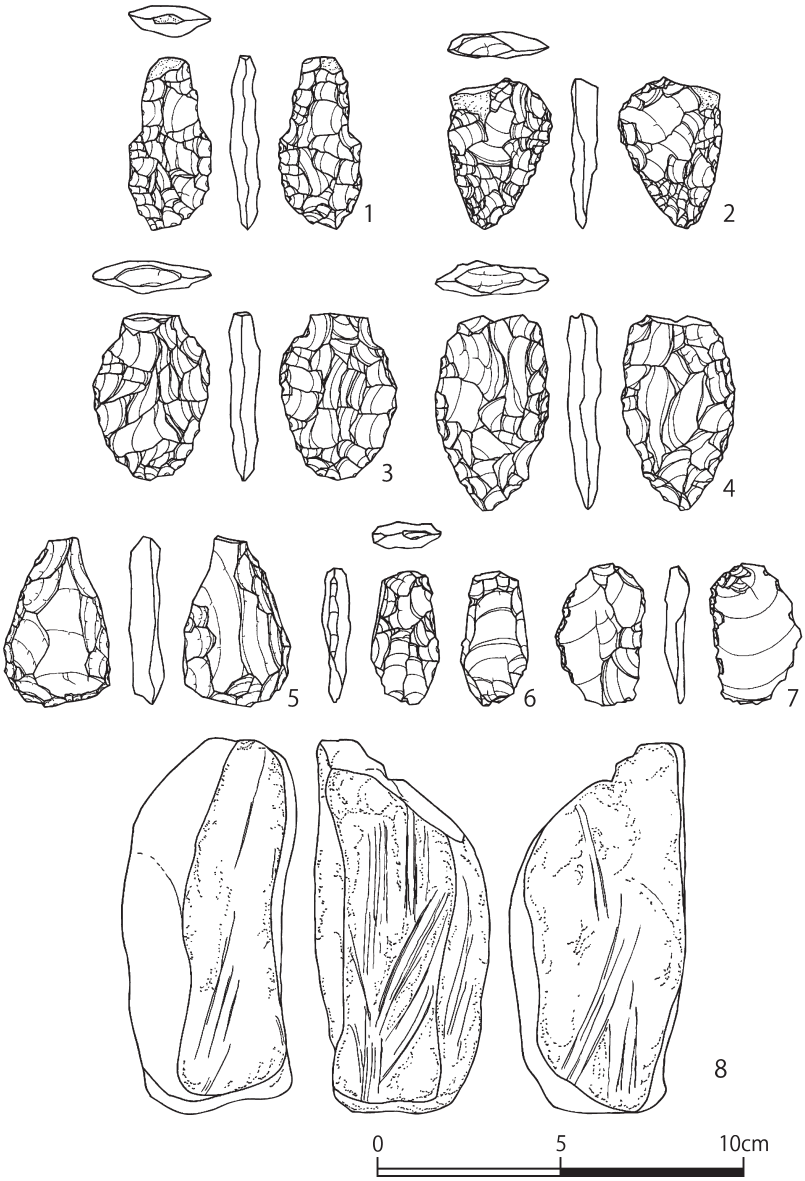
h）占守島・別飛第六号竪穴出土石器

別飛第六号竪穴出土石器は 8 点実見できた。剝片石器には有柄石器 6 点（第 25 図 1 ～ 4，第 26 図 1，2），掻器 1 点（第 25 図 5）があり，礫石器には砥石 1 点（第 25 図 8）がある。馬場報告中の「石鏃」1 点［岡・馬場（1938）図版 12－11，馬場（1939a）第 38 図 15］は確認することができなかった。

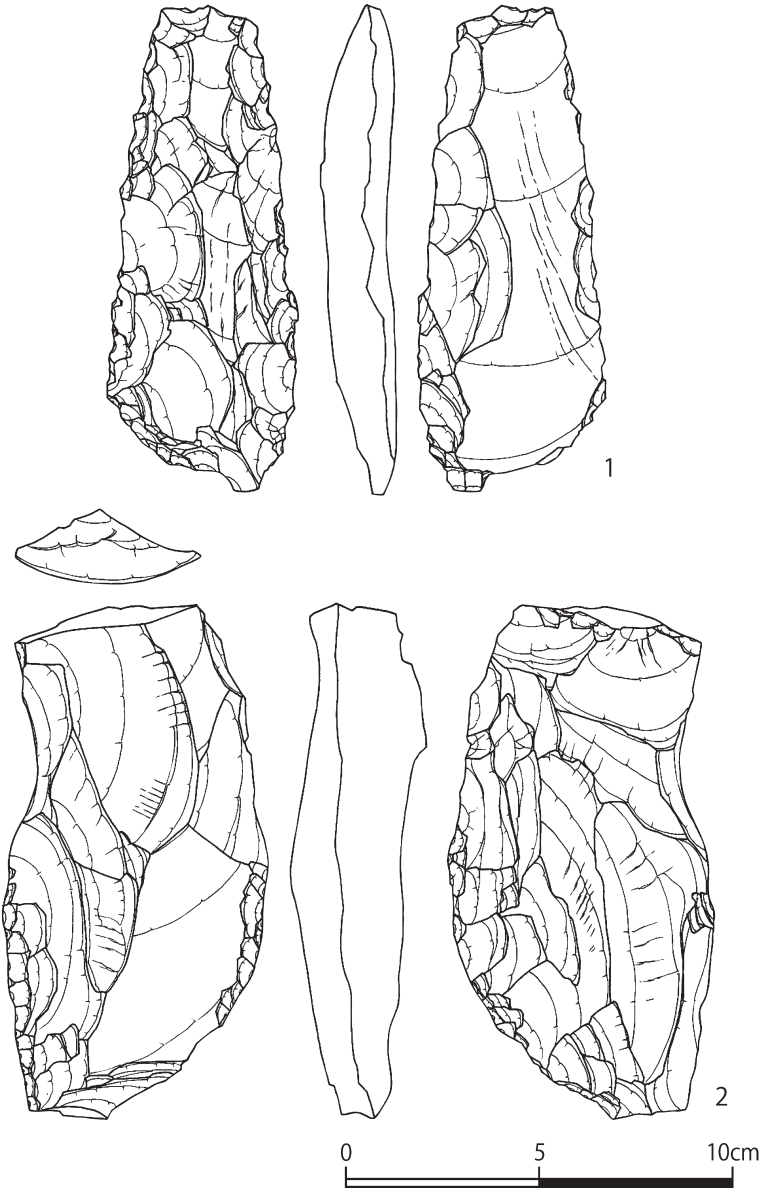
有柄石器は第 26 図 1 以外，すべて両面加工により整形されている。石器の平面形には，左右非対称で尖頭状の刃部をもつもの（第 25 図 1，2，第 26 図 2），左右非対称で直線的な刃部をもつもの（第 26 図 1），左右対称で尖頭状の刃部をもつもの（第 25 図 4），左右対称で弧状の刃部をもつもの（第 25 図 3）が確認された。第 26 図 1 が最大長 12.6 cm，第 26 図 2 が 13.2 cm と非常に大型である。岩石はチャート（第 25 図 1，2，4），メノウ（第 25 図 3），玄武岩（第 26 図 1，2）が用いられている。

第 25 図 5 の掻器は，器体周縁部に調整を施し，下端に湾曲した刃部を形作ったものである。刃部中央部の刃角は 49 度である。裏面にも平坦な剝離痕による調整が施されている。玄武岩製である。

第 25 図 8 の砥石は，正面・裏面・左側面に長軸に対して平行・斜行する線



第 25 図　石器(7)［1 － 5・8 ：占守島別飛第六号竪穴，6・7 ：占守島樺里第十号竪穴］



第 26 図　石器(8)［1 ・ 2 ：占守島別飛第六号竪穴］

状痕が観察される。所々に深い線状痕も確認される。凝灰岩製である。

ⅰ）幌筵島・樺里第十号竪穴出土石器

樺里第十号竪穴出土石器は，楔形石器１点（第 25 図 6），二次加工ある剝片１点（第 25 図 7）の計２点が確認された。馬場報告ではこれらの石器に関する記述はない。第 25 図 6 は，器体下端・上端に両極打撃法による剝離痕を留めている。器体の正面・裏面には両極打撃以前の調整も確認される。チャート製である。第 25 図 7 は，縦長の剝片の正面左側縁と裏面左側縁に調整あるいは使用による細かな剝離痕が生じたものである。黒曜石製である。

5．考察

⑴ 竪穴住居の変遷

ａ）平面形とサイズ

1930 年代当時の竪穴住居の調査は，地表面で確認された凹地の形態にしたがって，おもにスコップで掘削が行われていたと考えられる。断面や周堤の観察・記録も不十分ではあることは否めず，竪穴住居の形態的特徴が細部にいたるまで正しくとらえられていない可能性は十分に考えられる。ただし，現段階では馬場の調査成果がこの地域の竪穴住居に関する唯一の考古学的情報であり，それを吟味することで仮説を提示することにもまだ一定の有効性があることから，馬場の記載に依拠して遺構の考察を試みる。

竪穴住居の平面形は，以下の４つに分類することができる。

Ⅰ類：張り出し部をもたず，円形を呈するもの［潮見川第二号竪穴（第 6 図）］。

Ⅱ類：張り出し部を有し，長方形・方形を呈するもの［潮見川第一号竪穴（第 5 図），及川第一・四・八号竪穴（第 2 ～ 4 図），別飛第五・六号竪穴（第 9 ・10 図）］。

Ⅲ類：T・十字もしくは方形小室をともなう張り出し部を有し，長方形を呈するもの［別飛第一・二号竪穴（1937 年調査：以下省略）（第 7・

8図)]。

Ⅳ類：T字状の先端部と小室の双方をともなう張り出し部を有し，方形を呈するもの［樺里第十号（第11図)]。

竪穴住居の長さは，張り出し部のないⅠ類は4.43 mであるがⅡ類では張り出し部をふくめておおむね5～8 mの範囲に収まる。Ⅲ類は別飛第一号竪穴で約18.5 m，別飛第二号竪穴が10.5 mであり，Ⅱ類と比べて明らかに大型である。Ⅳ類は約9 mでありⅢ類と同様に大きい。なお，竪穴住居の幅に関しては，すべての類型がおおよそ4～5 mの範囲に収まり，類型間で大きな差はない。

張り出し部の長さはⅡ類でおおよそ1～2 mの範囲に収まるのに対しⅢ類の別飛第一号竪穴では約8.7 m，別飛第二号竪穴では約4 m，Ⅳ類の樺里第十号竪穴では約5 mとなりⅡ類とⅢ・Ⅳ類とのあいだで倍以上の差がある。住居本体の長さは，Ⅱ類がおおよそ4～5 mであるのに対して，Ⅲ類の別飛第一号竪穴が約10 m，Ⅲ類の別飛第二号竪穴が6.5 mと，Ⅱ類よりも大型となる。いっぽう，Ⅳ類の樺里第十号竪穴は4.7 mでありⅡ類と同程度である。

以上から，Ⅲ類は張り出し部と住居本体のサイズがともに他の類型に比して著しく大きいことが明らかである。また，Ⅳ類の張り出し部の長さはⅡ類よりも長いが，住居本体の大きさはⅡ類とⅣ類でそれほど大きな差はないことが理解できる。

b）付属施設・遺物出土位置の特徴

竪穴住居内では，柱穴，配石遺構，炉跡状遺構，石組炉，煙道状遺構，貝塚が検出されている。柱穴は，8軒の竪穴住居から計51基検出された。Ⅰ類の竪穴住居では柱穴は検出されておらず，もっとも規模の大きいⅢ類の竪穴住居でも明確な柱穴の配列は確認されていない。柱穴配置が明確で，かつ馬場の報告においても詳細な記載がある及川第一号竪穴，別飛第五号竪穴，別飛第六号竪穴を参考にすると，住居壁沿いにめぐる10基前後の柱穴群と住居中央部に位置する1～2基の柱穴群が存在していたと考えられる。柱穴の直径は15～20 cm前後，深さは20～60 cmほどで，壁沿いの一群と中心部の一群とのあいだに目立った規模の差はない。

配石遺構は，長さ約１～２m，幅約１m ほどの範囲に径 10 cm 前後の小石または径 20～30 cm の礫が敷き詰められた遺構である。Ⅳ類（樺里第十号竪穴）以外のすべての竪穴住居で計 16ヶ所，１軒につき１～３ヶ所が確認されている。住居内での配石遺構の位置は，前方壁側の隅付近が多い。潮見川第一号，第二号竪穴，別飛第一号竪穴では，配石遺構で炭化物・「灰土」や被熱した礫片も確認されており，火と関連する用途に利用されていたことが考えられる。このような遺構について鳥居龍蔵は，「灼熱させた多量の石の上に水をかけ，部屋中に心地よい水蒸気をたちこめさせる」暖房機能を想定している（Torii 1919［鳥居 1976：464］）。

炉跡状遺構は，径１m ほどの浅い掘り込みと２～３個の小石・礫で構成される遺構である。及川第一号竪穴，潮見川第二号竪穴，別飛第五号竪穴の３基で検出されているが，配石遺構にくらべて数がかなり少ない。潮見川第二号竪穴の炉跡状遺構は，配石遺構の下から確認されている。

石組炉（樺里第十号竪穴），煙道状遺構（及川第四号竪穴），貝塚（別飛第一号竪穴）はそれぞれ１ヶ所のみ検出された。石組炉は礫を方形に組んだもので，配石遺構と同じように前方壁側の隅付近に設置されている。煙道状遺構も前方壁に設けられており，その直下には２つの礫が置かれていた。カマドの可能性がある。貝塚は，報告によるかぎり，住居の床面とのあいだに若干の時間差が存在すると考えられ，住居廃絶後に形成された可能性がある。貝塚からは十数個のイヌ下顎骨が検出されており，宇田川洋は「イヌ送り」の遺構と推定している（宇田川 1989：96）。

住居内部における遺物の出土位置は，１）住居の張り出し部空間，２）加熱・暖房と関連する配石遺構・炉跡状遺構・煙道状遺構周辺，３）配石遺構などの遺構が隣接していない側壁・後方壁に集中する傾向がある。張り出し部空間と加熱・暖房設備周辺からは，とくに多くの遺物が出土している。石器器種と出土位置とのあいだには明確な規則性は見いだせないが，内耳土器の出土位置には一定の傾向がみられる。

内耳土器は，Ⅱ類の及川第四号竪穴では煙道状遺構周辺（完形と土器片数点），及川第八号竪穴では配石遺構付近（大型土器片），潮見川第一号竪穴に

おいては張り出し部空間（完形）と配石遺構周辺（完形），別飛第五号竪穴において張り出し部空間（土器片）と炉状遺構周辺（土器片）から出土している。Ⅲ類の竪穴住居では，別飛第一号竪穴で張り出し部空間の先端部（大型土器片）と長い通路部（土器片）から，Ⅳ類の竪穴住居では樺里第十号竪穴で前室にあたる第１室空間（完形）から出土している。内耳土器の出土地点は，「張り出し部空間・前室空間」と「加熱・暖房設備周辺」に集中しているのである。

住居出入口の張り出し部や日常生活の諸活動が行われている加熱・暖房施設（配石遺構・炉状遺構・煙道状遺構）周辺では，意図的ではない人為的な遺物の拡散（蹴飛ばしや踏みつけなど）があることも想定される。だが，小型の土器片はともかく，完形の土器や大型の土器片も数多く出土している点は等閑視することができない。このことは，「張り出し部空間・前室空間や加熱・暖房施設周辺」と「内耳土器」との間には規則的な空間的配置関係が成立することを強く示唆しており，人間の行為の結果が反映されているとみてよいと思われる。

ｃ）竪穴住居の変遷過程

竪穴住居の分類・付属施設・遺物出土傾向などをもとに，馬場編年「第二期」の竪穴住居の変遷を推定したい。この時期の住居の変化は，張り出し部が時間の経過とともに，出入口や住居本体から機能・用途的に独立性をつよめることにより，新たな空間として再構成されていった過程と推測される。

Ⅱ類においては出入口であった張り出し部に，Ⅲ類においてＴ・十字状や小室による先端部と長い通路をもつようになり，Ⅳ類では「主室」である住居本体から独立した「前室」へと変化していったと考えると類型間の形態変異と複室構造をとる馬場編年「末期」の住居との関係も整合的に説明できる。Ⅳ類の樺里第十号竪穴については，すでに馬場脩が「第Ⅲ期：末期」にみられる「ダンベル型」の竪穴住居への移行的形態あるいは祖形であると指摘している［馬場（1939a：79，1979c：87）］。

Ⅱ類の張り出し部には内耳土器をはじめとする遺物が集中することから，単なる出入口としてだけではなく，生活用具の収納空間としても利用されて

いたと考えられる。その後，Ⅲ類の段階において収納空間としての側面がさらにつよくなり，出入口と住居本体である「主室」から独立した「前室」がⅣ類において形成されたものと想定される。Ⅳ類の竪穴住居でみられる石囲炉は，馬場編年の「第三期：末期」の竪穴住居で多く検出されるもので，新たに出現した要素と考えられる。

以上の検討から，「第二期」に属する竪穴住居は，Ⅰ類→Ⅱ類→Ⅲ類→Ⅳ類と変遷していったと想定される[16]。

⑵ 土器の編年的位置づけ

馬場コレクションにふくまれる内耳土器の編年的な位置づけを，カムチャツカ半島南部の現地調査をもとに進展した近年の編年観（Takase 2013）を参考にして考察してみる。

高瀬は，北千島・カムチャツカ南部の内耳土器が模倣の対象となった鉄鍋の形態的特徴を欠落･変容させながら，Ⅰａ類→Ⅰｂ類→Ⅱ類→Ⅲ類の順に変遷したと推定した。もっとも古いⅠａ類は，放射性炭素年代測定によって15世紀後半～17世紀前半に位置づけられている。その特徴は，１）器壁が薄い（おおむね1.2 cm未満），２）口縁部外面に段がある，３）内面に幅が広く浅い「溝」がある，４）外反する口縁部と内面の「溝」が精緻に作出されている，５）内耳が小さく細く孔も小さい，６）突起がない，７）文様がつかない，などである。

いっぽう17世紀後半～18世紀に位置づけられるⅡ類は，１）器壁が厚い（おおむね1.2 cm以上），２）外面の段や口縁部の外反が不明瞭，３）内面の「溝」が不明瞭，４）内耳が大きく太く穴も大きい，５）内耳がつく位置で土器の外面側が盛り上がる，６）口縁部に突起をもつものが含まれる，７）文様が付されるものがある，８）内耳が口縁端部からかなり下につけられるものがある，などである。現時点で放射性炭素年代測定値は伴っていないが，Ⅰａ類とⅡ類の中間的な型式学的特徴をそなえるⅠｂ類が17世紀，出土遺構の特徴やロシア製鉄鍋の形態に類似するⅢ類が18世紀後半～19世紀初めと推定されている。

この編年観にしたがえば，現存する馬場コレクション中の内耳土器でもっとも古い段階に位置づけられるのは，潮見川出土資料である。第一号竪穴出土資料（第 12 図 3 ～ 5 ）は器壁の薄さや，口縁部外面の段，内面の「溝」，内耳の大きさなどからみてⅠa 類に分類され，鉄鍋の形態をもっともよくのこす 15 世紀後半～17 世紀前半の時間幅でとらえることができる。

第 12 図 1 は，内耳は小さいものの口縁部内面の「溝」は粘土紐による表現に形骸化しており，外面の段も沈線化した口胴区画として残存するのみとなっている。器壁も厚くなっており，2 では突起も現れてきている。Ⅰa 類とⅡ類の特徴が共存していることからⅠb 類に対比され，17 世紀の年代が与えられる。このほかⅠb 類に対比できる資料として，口縁内面の「溝」と突起や外面側の盛り上がりなどが共存する第 13 図 2，第 15 図 2・3，第 16 図 2 がある。

Ⅲ類はこれまでに占守島別飛第三号竪穴出土資料 1 点しかなく，現存の馬場コレクション中にこの資料は含まれていない。したがって，上記に記したⅠa・Ⅰb 類以外の資料は，基本的にすべてⅡ類に対比できると考えて大過ないと思われる。第 12 図 2・6，第 13 図 1・3・4，第 14 図 1 ～ 3，第 15 図 1，第 16 図 1 ・ 3 にみられる厚い器壁，大きな内耳，外面側の盛り上がり，突起，文様はすべてⅡ類の要件を満たしており，なおかつ口縁外面の段や内面の「溝」が完全に消失している点でⅠa・Ⅰb 類にさかのぼる可能性はない。17 世紀後半～18 世紀代に位置づけることができよう。

こうした年代観は，前節でふれた竪穴住居の変遷ともほぼ整合的である。住居ではもっとも古いと見なしうるⅠ類（潮見川第二号竪穴）の遺構から出土した土器はないが，Ⅱ類の潮見川第一号竪穴およびその近傍と考えられる潮見川から出土した土器はⅠa・Ⅰb 類のみである。住居のⅡ類に分類される及川第一号竪穴から出土した土器はⅠb 類とⅡ類が混在しており，17～18 世紀に位置づけてよいと思われる。このほか遺構と明確に対比できる土器はないが，少なくとも現時点では土器の編年と住居の変遷観が矛盾することはなく，前者は後者を補強する材料のひとつになっていると考えることができよう。

⑶ 石器群の特徴

馬場コレクションにおける北千島出土の石器資料は，おもに「第一期」と「第二期」のもので構成されている[17]。ここでは，「第二期」に属する竪穴住居出土の石器資料をひとつの石器群として認識し，石器組成や石器製作技術について検討する。

実見することのできた石器の組成は，剝片石器で有柄石器 20 点，掻器 2 点，石銛 1 点，両面調整石器 1 点，楔形石器 1 点，二次加工ある剝片 2 点，礫石器で石斧 9 点，敲石 1 点，砥石 1 点，石斧を再加工した楔形石器 1 点であった。有柄石器と石斧が多く，とくに有柄石器の形態が多様であった。また，「第一期」で多い石鏃が「第二期」では確認できなかった。馬場の報告で「石鏃」として分類された石器の多くが実見できなかったため，「第二期」における石鏃の量の実情は不明であるが，「第一期」と比べて減少傾向にあった可能性はある。利用されている岩石は，剝片石器でチャート 10 点，メノウ 10 点，玄武岩 3 点，黒曜石 3 点，礫石器で安山岩 9 点，玄武岩 1 点，凝灰岩 2 点である。剝片石器にはチャートとメノウが，礫石器には安山岩が多く利用されている。

掻器・削器・二次加工ある剝片の素材は，第 22 図 4 ・ 5，第 24 図 4 ・ 5，第 25 図 7 の石器に残存する石器素材時の背面・腹面形状の観察から，小型・中型の縦長の剝片（最大長 5 cm 程度）を連続的に剝離する石器製作技術により石器素材をえていることが確認された。定型的な剝片を連続的に剝離するため，石核にある程度の調整を施していたと考えられる。有柄石器に対しては石器素材を推定させる痕跡が明瞭には観察できなかったため詳細は分からないが，おそらく中・大型（最大長 10 cm 程度）の剝片を利用していたと考えられる。器体表裏の平坦剝離による両面加工に耐えられるだけの厚みのある剝片が剝離されていたと想定される。また，玄武岩製の有柄石器は最大長が 10 cm をこえ非常に大型であることから，原石からの分割・粗割による剝片を利用していたと考えられる。玄武岩製の石器が比較的大型であることから，玄武岩の大型の原石が比較的入手しやすかったことが想定される。

石斧は原石（あるいは厚手の大型剝片）の研磨によって製作されている（敲

打や擦切の痕跡は確認できなかった)。磨製石斧として使用し続けたことにより不具合が生じたばあいは打撃による調整を施すことで，研磨による鋭利な刃部ではなく階段状剝離による鈍い刃部が作り出されている。これにより，磨製石斧から打製石斧への変化，あるいは石斧から楔形石器への器種の転換もみられた。このような変形過程が確認できたのは，「第二期」の石器のなかでは石斧だけであった。

今回の再検討作業において，石器の年代を示す具体的な資料を確認することはできなかった。しかし，馬場の証言（馬場・甲野ほか 1936：205-206）や論文［馬場（1940：74，1979c：236)］から，内耳土器の底部と黒曜石製の大型の石槍［石鏃（馬場 1940)，(馬場 1979c)］が共伴した幌筵島「武蔵湾の高橋漁場付近の竪穴」［馬場（1940，1979c)］では 1746 年製造のロシア銅貨も出土したことが知られている。黒曜石製の大型の石槍（あるいは石鏃）とは，「第二期」に属する有柄石器の可能性が高い。このような仮定が成り立つとすれば，「第二期」の石器の使用・製作は少なくとも 18 世紀中頃までは続いていたと考えられる。しかしながら，年代の上限については決め手を欠くのが現状であるため，「第一期」や「第三期」の資料の再検討結果もふまえたうえで総合的に考察していく必要がある。

⑷ 馬場コレクションの今日的評価と注意点

馬場脩による北千島の発掘調査とその出土資料には，以下のような今日的意義があると考えられる。第 1 に，千島列島の最北端という特殊的な立地に起因する資料の希少性があげられる。南・中千島とくらべると北千島の資料数はきわめて少なく，現在にいたるまで馬場の調査に後続する大規模な発掘調査は実施されてきてはいない。それゆえに馬場コレクションは，北千島出土の考古学資料のなかでももっとも中心的な検討素材でありつづけており，この状況は今後すぐにかわることは考えにくい。

第 2 に，資料に付加された学術的情報の多さがあげられる。現在の調査のような精度は無論望むことはできないが，遺構の平面形，付属施設，出土位置，共伴関係などは，当時の日本考古学全体と比較してももっとも詳細かつ

情報量の多い部類の事例といって間違いないであろう。また，日本側やロシア側に存在する北千島出土の考古学資料の多くが表面採集資料であることを考えると，竪穴住居や貝塚から回収された資料体である点も馬場コレクションの価値を高めている。

第 3 に，千島列島や周辺地域で増加しつつある資料との比較対象としての重要性があげられる。ソヴィエト連邦崩壊後の国際的な共同研究により，断片的な情報の摂取をこえて体系的な情報交換や解釈の共有が行われるようになってきている。海外の研究者は，以前にも増して馬場コレクションに高い関心を抱くようになってきており，本稿のようなコレクションの再検討が日本のみならずひろく世界の研究者への良質な比較材料の提供につながると考えられる。

と同時に，馬場の発掘調査成果とそのコレクションを扱ううえで，いくつかの注意点も存在することが今回の筆者らの調査から浮かび上がってきた。第 1 に，市立函館博物館収蔵の馬場コレクションの考古学資料と，馬場自身が報告した考古学資料が完全には一致しない点である。馬場の報告にはみられるものの現在は確認できない資料（未確認資料），馬場の報告では写真・図面は掲載されていないが現在確認できる資料（未報告資料）がある（第 2 表）。前者はコレクションが戦禍を被っており完全なかたちでは残存していないことが大きく影響していると考えられるが，市立函館博物館以外の博物館・大学・研究施設等に収蔵されている可能性を探る余地はまだ残されている。事実，北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園に別飛第一竪穴（1937 年調査）のイヌ下顎骨や潮見川第二貝塚の海獣骨が保管されていることを高瀬が確認している。

未報告資料については馬場自身による資料の選択が大きく関わっていると考えられるが，先述（註 8）したような「占守島ベットブ九号竪穴」の注記などからみても寄贈後に誤って出土地が記録された可能性も完全には排除できない。現在，フィールドノートや遺物台帳が存在しないため効果的な検証作業は困難であるが，馬場コレクションの中には発掘調査風景や遺物を映した写真資料が函館市立図書館や北海道立北方民族博物館に未整理の状態で残

第 2 表　馬場コレクション（第二期竪穴関係）における未確認資料と未報告資料

遺跡名	未確認資料	未報告資料
及川第四号竪穴	内耳土器 2 点（馬場 1939a：第三十九図，馬場 1940：第三十八図，第三十九図左）	
潮見川第二号竪穴		楔形石器 1 点（第 19 図 3 ）
別飛第一号竪穴(1937 年調査)	「石鏃」3 点（岡・馬場 1938：図版五-11，12，13，馬場 1939a：第三十八図 13，14），「石器ブランク」1 点（岡・馬場 1938：図版五-16）	有柄石器 4 点(第 21 図 1，第 22 図 1)，掻器 1 点（第 22 図 4)，二次加工剝片 1 点(第 22 図 5)，石斧 2 点（第 23 図 2 ）
別飛第二号竪穴(1937 年調査)	「石器未成品」1 点（岡・馬場 1938：図版七- 4 ）	有柄石器 1 点（第 24 図 1 ）
別飛第六号竪穴	「石鏃」1 点（岡・馬場 1938：図版十二-11，馬場 1939a：第三十八図 15）	
樺里第十号竪穴		楔形石器 1 点（第 25 図 6)，二次加工剝片 1 点（第 25 図 7 ）

されている[18]。このような写真資料の検討は，当時の状況を検証・復元する有効な手段にもなりえるであろう。

第 2 は，発掘調査の精度の問題があげられる。馬場は，計 5 回の北千島調査において 60 軒以上もの竪穴住居を発掘している。馬場の報告から調査期間と調査された竪穴数の関係をしらべると，平均して 1 軒あたり約 1 日という非常にはやいペースで発掘を行っていたことになる。遺構の記録ではなく遺物の回収に調査の力点がおかれていたことは否めず，遺構の細部の情報を無条件に信頼してしまうことには危険がともなう。また，当時の日本考古学においては竪穴住居の発掘事例そのものがまだ少数にとどまっており，調査方法がかならずしも確立していなかったことも忘れてはならない。一定の制約・限界のなかでえられた情報に対して，現在的な研究視点による可能なかぎりの資料批判が今後も展開されるべきである。

おわりに

本稿では，馬場コレクションにおける北千島出土の考古学資料，とくに馬場編年の「第二期：内耳土器時代」に属する土器・石器とそれらを出す竪穴住居について再検討をおこなった。その結果，以下の点が明らかになった。

1）竪穴住居の変遷については，住居の出入口である「張り出し部」が住居主体部から機能的な独立性をつよめ，収納空間としての前室に変化し，「第三期：末期」の「ダンベル型」の竪穴住居へ繋がっていく過程を読み取ることができた。

2）内耳土器の年代は，比較的古い段階（15 世紀後半〜17 世紀前半）と新しい段階（17 世紀後半〜18 世紀代）のものが認められ，先後関係は出土した竪穴住居の年代観とも矛盾しない。

3）石器群には，多種多様な有柄石器と独自の変形過程を有する石斧の存在が確認され，石器の製作•使用の存続時期が 18 世紀中頃までは存続していた可能性が考えられた。

千島列島の歴史は，北方の島嶼部への人類の環境適応という人類史的側面と，国家・先住民・国境をめぐる境界史としての地域史的側面をもちあわせている。馬場コレクションは，千島列島とその周辺地域の人類史・地域史の双方の再構築にあたって，比類なき重要性をもった検討素材である。本稿は，その重要性をさらに引き出すことに一定程度貢献できたと考える。本稿の分担は高瀬が 3 章，5 章 2 節，英文要旨を作成したほか全体の編集・統括を行い，その他を鈴木が作成した。

謝辞

本研究の実施にあたり，下記の方々にお世話になった。記して感謝申し上げる（アルファベット順）。

藤原郁代，猪熊樹人，加藤博文，加藤　克，菊池俊彦，熊木俊朗，國木田大，Lebedintsev, A. I.，長沼正樹，野村　崇，野村祐一，大矢京右，杉浦重

信，Petrasheva, V. V.，Ptashinski, A. V.，佐々木利和，Slobodin, S. B.，Sokolov, A. M.，Sumina. I. A.，高倉　純，高橋　健，谷本晃久，丹菊逸治，手塚　薫，右代啓視，Vasilevski, A. A.。

本稿は，科学研究費補助金（若手研究（A），22682008，代表：高瀬克範），科学研究費補助金（基盤研究（C），24501266，代表：加藤　克），学術研究助成基金助成金（若手研究（B），25770274，代表：鈴木建治）による研究成果の一部である。

注

1）東京大学総合研究博物館所蔵の鳥居龍蔵が採集した考古学資料は，2010 年に再検討されている（熊木・高橋 2010）。

2）研究者による調査のほかに，1988〜1994 年に占守島と幌筵島において北クリル中学校で組織された A. P. マルシュクによる分布調査・表面採集なども実施されている（Самарин 2009: 26）。彼らが収集した資料によって，1990 年に博物館がつくられた。

3）「馬場コレクション」についての詳細に関しては，長谷部一弘(1992)と大矢京右(2012)の論文を参照した。

4）馬場脩が調査した遺構の詳細に関しては，高橋健（2010：80-82）と大矢京右（2012：52-67）によるリストを参考として，鈴木が実見した遺物注記も使用し検討した。

5）この貝塚は，第 2 回調査でも発掘されている。

6）馬場は後に「別飛第三貝塚」を「別飛土人墓地裏手砂丘貝塚」，「別飛第七貝塚」を「別飛アレキサンドル丘貝塚」へと遺跡名を変更している（馬場 1939a）。「別飛アレキサンドル丘貝塚」は，第 2 回調査でも発掘されている。

7）「別飛第一号竪穴」と「別飛第二号竪穴」は，第 4 回にも同名で調査されているが，両者はべつの遺構である。「1936 年調査」と「「1937 年調査」として区別する。

8）石器資料の注記において，「占守島ベットブ九号竪穴」と記載された資料が 3 点確認された。しかし，その内 1 点が馬場報告の別飛第五竪穴出土の石器であることが実見により判明した。発掘年が注記されていないのでいつの調査かはわからないが，注記時の間違いの可能性が高い。なお，「別飛第四号竪穴」については，1933 年にも調査されているため，第 1 回調査の未命名竪穴のなかの 1 軒の可能性がある。

9）馬場の編年により「第五号竪穴」は「第二期」に分類されているが（馬場 1939a），時期を推測する条件が整わなかったので今回は検討対象から外した。柱穴配置や柱材の残存状態などから比較的新しい住居であったのではないかと考えられる。

10）竪穴住居の記述に関して以下の基準にしたがう。

① 住居の計測値：住居の長さや幅は，張り出し部に対して垂直方向を「長さ」，水平

方向を「幅」とする。住居の深さは，発掘前に確認された竪穴住居跡のくぼみ地表面の比高差と完掘後の床面直上までの距離によって記述する。また，住居の壁については，張り出し部を基準に手前に位置する壁を「前方壁」，奥側の壁を「後方壁」として区別する。その他の壁は方位にしたがった。

② 住居内の遺構と出土遺物：遺構番号は，馬場の報告のものを使用する。石器資料の器種名については，実見できた資料は新たに設定し，できない資料に対しては馬場の設定にしたがい「」で区別する。

11）潮見川第二号竪穴出土の内耳土器片は内耳を伴わない土器片である。しかし，口縁部内部に幅約 2 cm の浅い「溝」が作り出されていることから，内耳土器と分類されている［馬場（1940：38），馬場（1979c：200)］。

12）記載では，「 3 つ」となっていたが，図面上では 2 つしか確認できなかった。

13）別飛第五号竪穴出土の内耳土器片数点は内耳を伴わない土器片である［馬場（1940：36)，馬場（1979c：198)］。詳細は不明である。

14）石器の最大長の差により，便宜的に，「大型（10 cm 以上)」，「中型（10 cm 未満 5 cm 以上)」，「小型（ 5 cm 未満)」の 3 つに分けて検討する。

15）「有柄石器」とは，「両側縁への二次加工によって，肩部を境に体部とは区別される柄部が作出されるもの」(高倉 2010：55) と定義されている。本稿ではこの定義に従い器種分類を行う。

16）張り出し部を持たない I 類の潮見川第二号竪穴や張り出し部が他の II 類より発達した潮見川第一号竪穴の編年的位置付けについては，まだ議論の余地あり今後の課題である。

17）「第三期：末期」に属する石器については，市立函館博物館において 1 点確認することができた。石器器種は敲石であり，別飛第三号竪穴から出土している［岡•馬場(1938a) 図版 9 － 3 ］。この他にも，確認することはできなかったが，馬場の報告の中で「四角型石器」と分類されている石器が 8 点検出されている［馬場（1939b：145-147)，馬場（1979c：153-155)］。この石器は，東京大学総合研究博物館所蔵資料では「ガンフリント」と分類されている（熊木他 2010：29，32)。樺里第十四号竪穴では，「鉛鉄砲玉」 2 点と「玉の鋳型」 1 点が「四角型石器」 3 点と共伴関係にあることからも［馬場（1939b：125-126)，馬場（1979c：133-134)］，この石器は「ガンフリント」として機能したことが理解できる。「ガンフリント」が北千島で製作されたものか，あるいは外部から製品として持ち込まれたかについては今後の課題である。現時点では，「第三期」において，「第一期」や「第二期」のような体系的な石器製作技術は存在しなかったのではないかと考えている。

18）馬場脩の発掘調査関連の写真資料に関しては，市立函館博物館の大矢京右氏のご教示によるものである。

引用文献

宇田川洋　1977『北海道の考古学』北海道出版企画センター。
宇田川洋　1979『アイヌ考古学』北海道出版企画センター。
宇田川洋　1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター。
宇田川洋　1989『UP 考古学選書 8　イオマンテの考古学』東京大学出版会。
大矢京右　2012「クリルアイヌに関する研究史と物質文化資料」佐々木馨教授退官記念論文集編集委員会編『佐々木馨教授退官記念論文集　地域と歴史教育』，35-69 頁，北海道出版企画センター。
岡　正雄・馬場　脩　1938「北千島占守島及び樺太多来加地方における考古学的調査予報」『民族学研究』4-3，117-180 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 2 』，174-261 頁，北海道出版企画センター）。
熊木俊朗・高橋　健　2010『千島列島先史文化の考古学的研究』，東京大学常呂実習施設研究報告第 7 集，東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
熊木俊朗・高橋　健・森先一貴・笹田朋孝　2010「 3　東京大学総合研究博物館所蔵の千島列島資料」熊木俊朗・高橋健編『千島列島先史文化の考古学的研究』，東京大学常呂実習施設研究報告第 7 集，19-60 頁，東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
市立函館博物館　1994『市立函館博物館蔵品目録 7　考古資料篇 4 』市立函館博物館。
高岡直吉　1901『北千島調査報文（北海道庁参事官高岡直吉復命書）』北海道庁（北海道出版企画センターより 1979 年に再版）。
高倉　純　2010「北海道の縄文時代晩期から続縄文時代前半期にかけての石器群の変遷」『北海道考古学』46，43-58 頁。
高橋　健　2010「 4 － 2　馬場脩による北千島調査について」熊木俊朗・高橋　健編『千島列島先史文化の考古学的研究』，東京大学常呂実習施設研究報告第 7 集，75-82 頁，東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
鳥居龍蔵　1903『千島アイヌ』吉川弘文館（再録：鳥居龍蔵　1976『鳥居龍蔵全集 7 』，1-98 頁，朝日新聞出版社）。
鳥居龍蔵　1976a『鳥居龍蔵全集 5 』朝日新聞出版社。
鳥居龍蔵　1976b『鳥居龍蔵全集 7 』朝日新聞出版社。
長谷部一弘　1992「馬場コレクション研究―函館博物館所蔵アイヌ民族資料いわゆる「馬場コレクション」について―」『市立函館博物館研究紀要』 2，1-24 頁。
馬場　脩　1934「北千島占守島に於ける考古学的調査報告」『人類学雑誌』49-2，39-63 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 1 』，33-66 頁，北海道出版企画センター）。
馬場　脩　1936「北千島占守島の第二回考古学的調査報告」『人類学雑誌』51-3，91-115 頁

(再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 1 』，67–108 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1937a「占守島最近の竪穴と今次の発掘」『ミネルヴァ』2–2，47–54 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 1 』，120–130 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1937b「第三回北千島占守島の竪穴発掘」『考古学雑誌』27–3，59–62 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 1 』，109–113 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1937c「アイヌの土鍋（Toi-shu）に就いて」『東京人類学会・日本民族学会連合大会第二回紀事』，27–31 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 1 』，114–119 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1937d「北千島樺太の考古学的調査」『考古学雑誌』27–11，780–782 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 1 』，131–134 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1939a「考古学上より見たる北千島（一)」『人類学・先史学講座 10』，1–107 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 3 』，9–115 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1939b「考古学上より見たる北千島（二)」『人類学・先史学講座 11』，109–154 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 3 』，117–162 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1940「日本北方地域及び附近外地出土の「内耳土鍋」に就いて」『人類学・先史学講座 14』，1–104 頁（再録：馬場　脩　1979c『樺太・千島考古・民族誌 3 』，163–266 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩　1970「占守島及川第十号竪穴出土の繊維性遺物」『北海道考古学』6，67–70 頁（再録：馬場　脩　1979『樺太・千島考古・民族誌 1 』，199–204 頁，北海道出版企画センター)。
馬場　脩・江上波夫・後藤守一・伊東信雄・喜田貞吉・三上次男・山内清男・八幡一郎・甲野　勇　1936「座談会　北海道・千島・樺太の古代文化を検討する ── 古代北方文化の構造と系統 ──(一)」『ミネルヴァ』1–5，195–208 頁。
馬場　脩　1979a『樺太・千島考古・民族誌 1 』北海道出版企画センター。
馬場　脩　1979b『樺太・千島考古・民族誌 2 』北海道出版企画センター。
馬場　脩　1979c『樺太・千島考古・民族誌 3 』北海道出版企画センター。
馬場　脩　1979d『北方民族の旅』北海道出版企画センター。
プタシンスキー，A. V.・高瀬克範　2008『ナルィチェヴォ 9 遺跡発掘調査報告書(2006–2007 年)』国立カムチャツカ大学。
Fitzhugh B., Shubin V. O., Tezuka K., Ishizuka Y., and Mandryk C. A. S. 2002 Archaeology in the Kuril Islands: Advances in the Study of Human Paleobiogeography and Northwest Pacific Prehistory, *Arctic Anthropology*, 39(1–2), pp. 69–94.
Takase, Katsunori 2013 Chronology and Age Determination of Pottery from the Southern Kamchatka and Northern Kuril Islands, Russia, *Journal of the Graduate*

School of Letters, 8, pp. 35–61, Graduate School of Letters, Hokkaido University.

Torii, Ryuzo 1919 Etudes Archéologiques et Ethnologiques: les Aïnou des Iles Kouriles, *Journal of the College of Science*, 42(1), pp. 1–337, Imperial University of Tokyo. (和訳再録：鳥居龍藏　1976「考古学民族学研究・千島アイヌ」『鳥居龍藏全集 5』, 311–553 頁, 朝日新聞出版社)。

Голубев, В. А. 1996 Археологическая коллекция с о. Шумушу в музее антропологии МГУ (г. Москва), *Вестник Сахалинского музея*, №3, с. 235–243, Сахалинский областной краеведческий музей.

Желубовский, Ю. С. 1964 Археологические находки в четвертичных отложениях Курильских островов, Геология СССР, т. XXXI, с. 561–565, Москва.

Самалин, И. А. 2009 Археология Курильских островов: Археологичесие исследования, ред., Котляков В. М., Бакланов П. Я, Комедчиков Н. Н. *et al.*, *Атлас Курильских островов*, «Дизайн, информация, картография», с. 24–26, Владивосток.

Шубина, О. А. 1977 Первые бескерамические комплексы на Сахалин и Курилах (по материалам разведок 1972–1974гг.), *Исследования по археологии Сахалинской области*, с. 6, Владивосток.

Re-examination of Baba Collection: A Basic Study on Pit Dwellings, Pottery and Stone Tools from the Northern Kuril Islands

Katsunori TAKASE and Kenji SUZUKI

The purpose of this study is to revaluate the significance of archaeological artifacts that were collected by Osamu Baba in the Northern Kuril Islands during 1933 and 1938. In 1971 and 1972, this collection was donated to Hakodate City. Ethnographic materials are housed in the Hakodate City Museum of Northern Peoples, and archaeological specimens are in the storage of Hakodate City Museum. This study focuses on archaeological artifacts associated with clay vessels with inner lugs known as *Naiji* pottery on Shumsh and Paramushir Islands. Results of this study are as follows:

1) Using plan view and size as criteria, we classify semi-subterranean residences into four groups: types I, II, III and IV. Typologically, type I with plain circular plan view should be assigned to the oldest stage; the entranceway began to be attached to pit dwellings during type II period. Residences of type III have a longer entranceway, and it has some additional small rooms for storage shed during type IV period.
2) Chronological inspection of *Naiji* pottery suggests that specimens from the Shiomigawa site and part of pottery from the Kodomari and Bettobu sites are assigned to the older stage (the latter half of the 15th century to the former half of the 17th century). Other specimens are dated to a period after the second half of the 17th century to 18th century.

3) Chipped stone tools are mainly made of obsidian, chert and agate. Tool composition is characterized by the lack of arrowhead and numerous bifacial “tongued stone tools.” Ground stone tools are consisted of axe and grinding stone. Axes are occasionally made of andesite and tuff. There is a specimen that demonstrates that axe can be diverted to wedge.
4) In some specimens, sites and locations marked on artifacts are not consistent to Baba’s description in his reports. This erroneous should be taken into consideration when we study this collection, although it is the largest and the most significant material in the Northern Kuril Islands with a high academic value.